

□

かれ、天の下知ろしめさんとせし間、平群の臣の祖、名は志毘の臣、歌垣に立ちて、その袁祈の命の婚さんとする美子の手を取れり。その嬢女は、菟田の首が女、名は大魚といへり。かれ、袁祈の命、亦歌垣に立たしき。是に志毘の臣歌ひけらく

大宮の 彼つ鰭平 傾似けり。

かく歌ひて、その歌の末を乞ふ時に、袁祈の命歌ひ給はく、

大匠拙劣こそ 隅傾けれ

かれ、志毘の臣亦歌ひけらく、

王の 心を寛み 臣の子の 八重の柴垣 入り立たずあり

是に、王亦歌ひ給はく

潮瀬の 波折を見れば 遊び來る 鮪が鰭手に 妻立てり見ゆ

こゝに、志毘の臣、愈忿りて、歌ひけらく

大君の 王の柴垣 八節結 結び廻ほし 截れむ柴垣 焼けむ柴垣

こゝに、王子亦歌ひ給はく、

大魚よし 鮪突く海夫よ 其が荒れば うら戀ほしけむ 鮪突く鮪

かく歌ひて、鬪ひ明かして、退けましき。明日めて意富祈の命、袁祈の命、二柱、議り給はく、凡て、朝廷の人等は、朝には、朝廷に參り、晝は、志毘が門に集ふ。かれ、今は鮪、必ず寝たらむ、其の門に人も無けむ。かれ、今ならずは、謀り難けむと謀りて、即ち軍を興して、志毘の臣の家を、圍みて、殺り給ひき。

□

語義 ○志毘の臣 は平群の眞鳥の子である○歌垣 これはうたかがひともいうて、或る場所に男女相合して、雙方から歌をうたひかけながら踊つて遊ぶ事である。○大宮の云々 をとつは彼のといふ意。鰭手は屋根の端をいふと眞淵が説いて居る。隅傾けりといふのは、家の屋根のはしの木の隅が傾いたといふので、太子が手持不沙汰におはする事を笑うて歌つたのである○大匠云々 大匠は大工の仕事が下手であるから斯ういふ事になるのだといふ意味○心を寛み 迫らざるさま寛大なるをいうたのである。われは従容として容易

に手を出さぬぞといはれたので、この歌はたしかに太子の作と見る方がよい。これは古事記傳にも説かれた事で、前の歌も日本書紀の通り、命の歌と臣の歌と入り交て居るといふのが正しいと思はれる。○潮瀬の波折潮の瀬に立つ波のさきの折れる様を見ればの意○鮪が鮪手に云々 鮪の鮪の所に妻のたつて居るのが見えるといふ事で、これは王の最初に女子に對して詠まれた歌である。此のところ歌の位置が様々に入り交じつて居るのは、後世筆寫の誤から來た事である。○大君の云々 この歌は志昆の臣の詠んだもので、大君の結ひまはせる垣がいかにも固くとも、我れ一度起ちなば裁りもし焼きもすること自由であるの意○大魚よし、これは王から女子に送られた歌で、大魚よしは鮪の枕詞、鮪はもとより志昆の臣にたとへられたのである。鮪突くは女子が志昆の臣を戀うて慕ふ有様にたとへて、其が荒れは汝が私を離れて行けばの意で、志昆を慕うて汝が私を離れて行けば、愈私は汝を戀しく思ふぞと詠まれた。結句の鮪つく、鮪は古歌にいつも様かへす形である。○凡て朝廷の人たち云々 これを見れば當時志昆の臣がどんなに權勢を專にして居たかが窺はれる。日本書紀にこの話は武烈天皇と影媛と鮪の臣の事となつてゐる。

こゝに二柱の王子たち、かたみに、天の下を相譲り給ひて、意富祈の命その御弟袁祈の命に譲り給はく、「針間の志自牟が家に住めりし時に、汝が命、名を顯はし給はざ

らましかば、更に天の下を臨らせむ君とは、爲らざらましを、汝が命の功ありけるにぞ、かれ、吾、この兄にはあれども、猶、汝が命、先づ天の下を知ろしめしてよ」といひて、堅く譲り給ひき。かれ、得辭み給はずして、袁祈の命ぞ、先づ天の下知ろしめしける。

語義 ○針間の志自牟が家 播磨の縮見の家で、あなたが皇胤たる事を名告らなかつたならば、今の事は出て來ないのであるから、汝が皇位に立つべきであるといはれたのである。○清寧天皇の御年や御陵の事は、この記に記載が無いけれども、日本書紀には、「御年若干、河内國坂門陵に葬るとある。諸陵式には河内國古市郡でその兆域東西二町南北二町とある。今は大字西浦といふ所に七千餘坪の御陵が定められてある。

清寧天皇の御即位から崩御後のごたくした事、遂に袁祈の命即ち顯宗天皇の御起ちになる迄の話は終つた。皇位繼承の事が一度頓挫しかけたのは、こゝがはじめてであつて、これを見出した時の小楯の連の喜悅は誠に想像に餘りある。上下一

致君臣和合、金甌無缺、この國家の安泰、毎度ながら更に繰返したくなる。意富祈の命、袁祈の命と、志毘の臣との争に女が入つて居る事は、最早かゝる事情になれて、少しもめづらしくは感じない事となつた。

□ 顯宗 天皇

袁祁之石巢別の命、近飛鳥の宮にましまして、天の下、八歳知ろしめしき。此の天皇。石木の王の女、難波の王に娶ひましき、御子はまさどりき。此の天皇、其の父王、市邊の王の御骨を求ぎ給ふ時に、淡海の國なる賤しき老嫗、參出で、申しけらく、王子の御骨を、埋みたりし所は、専ら吾能く知れり。亦その御齒もて知るべし」と申しき。(御齒は三枝なす押齒ませりき。)

かれ、民を起て、土を堀りてその御骨を求ぎて、即ちその御骨を獲給ひて、その蚊屋野の東山に、御陵を作りて、葬め奉りき。韓俗が子等に、その御陵を守らしめ給ひき。かれ、還り上りまして、その老嫗を召して、其の地を忘れず見置きて、知れり

し事を譽めて、置目老嫗といふ名を賜ひき。かくて、宮の内に召し入れて、敦く、廣く、慈み給ひき。かれ、その老嫗の住む屋をば、宮邊近く作りて、日毎に、必らず、召しき。かれ、大殿の戸に、鐸を懸けて、その老嫗を召さむとする時は、必ず、その鐸を引き鳴らし給ひき。かれ、御歌誦みし給へる、その御歌

淺茅原 小谷を過ぎて 百傳ふ 鐸動らぐも 置目來らしも

是に、置目老嫗、僕いたく老いにたれば、本つ國に退からまほしと申しき。かれ、申せるまゝに、退り給ふ時に、天皇見送らして、歌ひ給はく。

置目もや 淡海の置目 明日よりは 御山隠りて 見えずかもあらむ

初め、天皇、難に逢ひて、逃げまし、時に、その御糧を奪りし猪飼の老人を求ぎ給ひき。是に、求ぎ得たるを、喚び上げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆その族どもの膝の筋を断ち給ひき。是を以て、今に至るまで、その子孫、倭に上るに、必らず、自ら跛くなり。かれ、その老人の所在を能く見しめき。かれ、その地を志米須とい

語義 ○袁<sup>い</sup>、祁<sup>い</sup>、石<sup>い</sup>、巢<sup>い</sup>、別<sup>い</sup>、命<sup>い</sup> 顯宗天皇を申し奉る ○近<sup>い</sup>、飛<sup>い</sup>、鳥<sup>い</sup>、宮<sup>い</sup> これは履仲天皇の條に曾婆訶理が大鏡を呑んでその面のかくれた時に彼を殺し給うた地である。今の河内國南河内郡駒谷村大字飛鳥地 ○その父<sup>い</sup>、市<sup>い</sup>、邊<sup>い</sup>、の<sup>い</sup>、王<sup>い</sup>、此も前に此の王が雄略天皇に殺され給うた事が見ゆる ○御<sup>い</sup>、齒<sup>い</sup>、云々 この王の御齒は三枝の三莖相對せるが如き形をなしたもので、押齒ともいふべき特長を持つて居たといふ事であらう ○蚊<sup>い</sup>、屋<sup>い</sup>、野<sup>い</sup> 安康天皇の條にも見えたとが淡海國蒲生郡の日野の内音羽村にある ○置<sup>い</sup>、日<sup>い</sup>、老<sup>い</sup>、嫗<sup>い</sup> 目をかけたといふ意味から置目の名が出たのである ○鐸<sup>い</sup> 説文に大鈴なりとある。それである ○淺<sup>い</sup>、茅<sup>い</sup>、原<sup>い</sup>、云々 百傳ふとは置目の住ひから皇居までの間にある多くの山々谷々に、皆鈴をかけて置目の來るのを知るやうにしたといふ意。百傳ふは鐸にかゝる詞 ○置<sup>い</sup>、目<sup>い</sup>、も<sup>い</sup>、云々 なつかしき置目よ、淡海の置目よ、明日からは山かくれ行いて、最早そのなつかしい姿が見られないと歎かれたのである ○初<sup>い</sup>、め<sup>い</sup>、天<sup>い</sup>、皇<sup>い</sup>、難<sup>い</sup>、に<sup>い</sup>、逢<sup>い</sup>、ひ<sup>い</sup>、て 此事は安康天皇の條の終の方に、「是に市邊王の子等、意富祈の王、袁祁の王、の二柱、此の亂を聞かして、逃げ去りました云々」といふ段がある。即ち韓俗に伴はれて市邊之忍齒の王が蚊屋野に猪鹿狩に出で給うた時、大長谷の王の爲に射落された後の事を指していふのである ○跋<sup>い</sup>、く<sup>い</sup>、か<sup>い</sup>、 祖先の罪の報で朝參の位俊に上る時皆跋をひくといふたのである ○志<sup>い</sup>、米<sup>い</sup>、須<sup>い</sup>、 上に見しめとあるしめた因んだ地名であるのは確であるが、今夫れが何處の地であるといふ事は、まだ研究せられて

居らぬ。

□

天皇、その父王<sup>ちしみこ</sup>を殺し給ひし大長谷の天皇を、深く怨み奉りて、その靈<sup>みたま</sup>に報いむと思ほしき。かれ、その大長谷天皇の御陵を毀らむと思ほして、人を遣はす時に、その伊呂兄<sup>いろせ</sup>、意富祈の命の奏し給はく、「是の御陵を壞らむには、他人を遣はすべからず、専ら、僕、自ら行きて、天皇の御心のごと、壞りて參出<sup>ま</sup>でむ」と申し給ひき。かれ、天皇、「然らば、命<sup>みこと</sup>のまゝに、幸<sup>さい</sup>ませ」と詔り給ひき。是を以て、意富祈の命、自ら下り幸<sup>さい</sup>まして、その御陵の傍を、少し掘りて、還り上らして、「既に掘り壞<sup>やぶ</sup>りぬ」と申し給ひき。こゝに、天皇、その早く還り上りませることを、異<sup>あや</sup>しみまして、「如何さまに、壞り給ひしぞ」と詔り給へば、「その御陵の傍の土を、少し掘りつ」と申し給ひき。天皇、詔り給はく、「父王の仇を、報いむと思ふなれば、必らず、その御陵を、悉<sup>ことごとく</sup>に壞りてむを、何ぞ少し掘り給ひしぞ」と詔り給へば、申し給はく、「然<sup>しか</sup>しつる所

以は、父王の仇を、その靈に報いむと思ほすは、誠に理なり。然れども、その大長谷天皇は、父の仇にはあれども、還りては、我が従父にまし、また天の下知ろしめし、天皇に座すを、今、ひとへに父王の仇といふ志をのみ取りて、天の下知ろし、天皇の御陵を悉に壞りなば、後の世の人、必らず、誹り奉りてむ。唯し、父王の仇は報いずばあるべからず、かれ、その御陵の邊を、少し掘りつ。既にかく恥見せ奉りてあれば、後の世に示すにも、足へなむ。かく申し給ひつれば、天皇、「是も亦いと理なり。命の如くて、可し」とぞ、詔り給ひける。

かれ、天皇崩まして、即ち意富祈の命、天津日繼を知ろしめしき。天皇、御年三十八歳。天の下知ろしめしき。御陵は、片岡の石杯の岡の上にある。

語義 ○大長谷の命 は雄略天皇である○石杯の岡 は大和の國葛下郡にある。御陵の兆域東西二町南北三町といふ今の大字北今市といふ地で千三百餘坪もある。

顯宗天皇の御一代はこれで終つた。御即位後直ちに御父天皇の御陵を修め給ひ、その事に與つて力のあつた置目の老嫗を愛敬し給うた御心は淺茅原の御製によくわかる事で、一天萬乗の君が國民にその行ふべき道、修むべき徳、それをさながらに示し給ふ、この古事記の記事は、どうしても國民道德の發源と云はねばならぬ。第二段に至つても、御兄弟の御仲を以て兄君が復讐の爲雄略天皇の御陵をあばきに御出でになつた時のそのなされ方、御智勇、御發明、吾等は實に父子兄弟の道をそのまゝに教へられて、意富祈の命後の仁賢天皇が一言一行は、皆以て國民の規とすべきものであると思ふ。千萬の言必ずしも惡しきにはあらず、法を説き道を述ぶるも、これみな衆生濟度の爲ではある。然し乍ら吾々は百日の説法よりも一の善行を見聞して、其所に心氣の爽かなるを感ずる場合が多い。

□ 仁賢天皇

意富祈の命、石の上の廣高の宮にましまして、天の下知ろしめしき。此の天皇大長谷の若建の天皇の御子、春日の大郎女に婚ひまして、生みませる御子、高木の郎女、次に、財の郎女、次に久須毘の郎女、次に手白髪たしろがみの郎女、次に、小長谷せはつせの若雀わかさぎの命、次に、眞若王まわかつ、又丸邇わづの日爪ひつまの臣の女、糠ぬかの若子郎女わかくこを娶して、生みませる御子、春日の山田の郎女、此の天皇の御子たち、併せて、七柱、此の中に、小長谷の若雀わかさぎの命は、天の下知ろしめしき。

□

語義 ○意富祈の命 は即ち仁賢天皇である○石の上廣高の宮 大和國山邊郡今の二階堂村大字嘉幡地である○こゝには天皇の御年も御陵も記していないが、諸陵式によると、これを埴生坂本陵としてある。これは河内國丹比郡にあつて、兆域東西二町南北二町。今大字野中といふ地で五千餘坪ある。

□

意富祈の命仁賢天皇の御一代こそ、實に畏れ多いがくれぐれも敬服し奉るべき事どもである。はじめ顯宗天皇と共に力を合せて治國の大道を定め給ひ、その功の跡

からざるに、なほ先づ弟王を立て、位に即かしめ、天皇を輔佐して大に國威を輝かした。更に自ら即位せらるるに及んでは、從父上とも申しながら、仇敵たる雄略天皇の御女を、皇后に立たしめ、雄略帝の御名大長谷の若建の命といふを取て名づけた少長谷の若雀の命を後嗣に定めて後の武烈天皇と爲さしめ給うた。その御心事の深さ廣さ、まさに萬民の仰ぎ奉るべき高德を備へ給うて、一天に君臨し給ふ有がたさを感じずには居られぬ。我が日本帝國の天皇陛下が下萬民の御鑑であるといふ事は、よくこれでわかる。

□ 武烈天皇

小長谷せはつせの若雀わかさぎの命、長谷はつせの列木れつぎの宮にましまして、天の下八歳しちじふ治ろしめしき。此の天皇、太子ひつぎのみこ子ましまさず、かれ、御子代として、小長谷部を定め給ひき 御陵は、片岡の石杯いはつせの岡にあり。天皇既に崩かむろりまして、日繼知ろしめすべき王ましまさず。かれ、品太ひんだの天皇の五世いつつぎの孫、袁本杼をぼとの命を、近淡海あふみの國より上り坐まさしめて、手白髪たしろがみ

の命に合せまつりて、天の下を授けまつりき。

語義 ○小長谷の若雀の命 即ち武烈天皇である○長谷の列木宮 今の和歌山磯城郡初瀬町大字出雲といふ地にあつた○片岡の石杯の岡 大和國葛城郡志津美村大字今泉の地であるといふ。諸陵式の兆域は東西二丁南北二町 今の地は九千餘坪ある○品太天皇 は應神天皇

日本書紀には武烈天皇の事が、この記と異つていろく書いてある。又天皇崩御の年についても、種々の議論がある。

□ 繼體 天皇

袁本杵の命、伊波禮の玉の穗宮にましまして、天の下知ろしめしき。此の天皇、三尾の君等が祖、名は若比賣を娶して、生みませる御子、大郎子、次に出雲の郎女、二柱、又尾張の連等が祖、凡の連が妹、目子の郎女を娶して、生みませる御子、廣國押建金日の命、次に建小廣國押楯の命、二柱、又意富祈の天皇の御子、手白髪(はしら)の命(是

は大后にます)に婚ひまして、生みませる御子、天國押波流岐廣庭の命(一柱)又息長の真手の王の女、麻組の郎女を娶して、生みませる御子、佐佐宜の郎女(一柱)又坂田の大股王の女、黒比賣を娶して、生みませる御子、神前の郎女、次に茨田郎女、次に、馬來田の郎女(三柱)又茨田連、小望が女、關姫を娶して、生みませる御子、茨田の大郎女、次に、白坂活日の郎女、次に、小野の郎女、又の御名は、長目姫(三柱)又三尾の君、加多夫が妹、倭姫を娶して、生み産せる御子大郎女、次に丸高の王、次に、耳の王。次に赤姫の郎女(四柱)又阿倍之波延姫を娶して、生みませる御子、若屋の郎女、次に都夫良の郎女、次に阿豆の王、三柱。此の天皇の御子たち、並せて十九柱(男王七、女王十二)此の中に、天國押流波岐廣庭の命は、天の下知ろしめしき。次に廣國押建金日の命も、天の下知ろしき。次に、建小廣國押楯の命も、天の下知ろしめしき。次に、佐佐宜の王は、伊勢神宮を齋き奉り給ひき。此の御世に、筑紫の君石井、天皇の命に、従はずして、禮なき事多かりき。かれ、物部

荒甲之大連、大伴之金村の連二人を遣はして、石井を殺らしめ給ひき。天皇、御年四十三歳、御陵は三島の藍にあり。

語義 ○袁本村の命 繼體天皇の事○佐佐宜王 これは伊勢神宮の齋宮（いつきのみや）になり給うたのである齋宮が此の皇女からはじまつたわけではないが、この記には特にこの皇女が記されてある○筑紫の君石井 この謀叛の事は書紀の方に詳しく書いてある。その戦争の記事もある。戦争のあつた地は人形が原といはれて、筑紫國岩戸山にある石人十體、所謂石人が今に残つた。その一は今東京の帝室博物館にある○御年 書紀の方には八十二とある○御陵 三島の藍は攝津國三島郡三島村大字太田といふのが今の村で、諸陵式には兆域東西三町南北三町。今は一萬九千餘坪。

□ 安閑天皇

廣國押建金日の命、勾の金箸の宮にましまして、天の下知ろしめしき。此の天皇御子ましましてよりき。御陵は、河内の古市の高屋村に在り。

語義 ○勾の金箸の宮 今の和國高市郡金橋村大字曲川の地○河内の古市の高屋村 今の河内國南河内郡

古市町大字古市

□ 宣化天皇

建小廣國押楯の命、檜堀の廬入野の宮にましまして、天の下知ろしめしき。此の天皇、意富祈の天皇の御子、橘の中つ姫に婚ひまして、生みませる御子、石姫の命、次に、小石姫の命、次に、倉之若江の命、又川内之若子姫を娶して、生みませる御子、火穂の王、次に惠波の王、此の天皇の御子等、併せて五柱（男王三、女王二）かれ、火穂の王は（志比陀君の祖）惠波王は（韋那の君多治比君の祖なり）

語義 ○建小廣國押楯命 即ち宣化天皇である○檜堀の廬入野宮 今の和國高市郡坂合村大字檜前とハハ地○この天皇の御年も御陵もこゝに記されて居らぬが、書紀によれば、御年七十三。御陵は大和の身狭桃花鳥坂にある。兆域は東西二町南北二町。今大字鳥屋といふ所で六千餘坪ある。

□ 欽明天皇

天國押波流岐廣庭の天皇、師木島の大宮に、ましまして、天の下知ろしめしき。此



の天皇、檜桐の天皇の御子、石比賣の命に娶ひまして、生みませる御子、八田の王、次に沼名倉太玉敷の命、次に、笠縫の王、三柱、また其の弟、小石姫の命に娶ひまして、生みませる御子、上の王、(一柱)、又春日之日爪の臣の女、糠子の郎女を娶ひして、生みませる御子、春日の山田郎女、次に鷹古の王、次に、宗賀之倉の王、(三柱。)又宗賀之稻目の宿禰の大臣の女、岐多斯姫を娶ひして、生みませる御子、橘之豊日の命、次に、妹石桐の王、次に、足取の王、次に豊御氣炊屋姫の命、次に、また鷹呂古の王、次に大宅の王、次に、伊美賀古の王、次に、山代王、次に、妹大伴の王、次に、櫻井之玄の王、次に、麻奴の王、次に、橘本之若子の王、次に、泥杼の王、(十三柱)。また、岐多志比賣の命の姨、小兒姫を娶ひして、生みませる御子、馬木の王、次に、葛城の王、次に、間人の穴太部の王、次に三枝部の穴太部の王、またの名は須賣伊呂杼、次に、長谷部の若雀の命(五柱)。すべて此の天皇の御子たち并せて廿五王。この中に沼名倉太玉敷の命は、天の下治しめしき。次に橘之豊日の命も、天の下治しめしき。次

に豊御氣炊屋姫の命も、天の下治しめしき。次に長谷部之若雀の命も、天の下治しめしき。併せて四王なも、天の下治しめしける。

語義 ○天國押波流岐廣庭天皇 欽明天皇を申し奉る(檜桐)天皇 宣化天皇を申し奉る○この天皇も御年御陵の事が記されていない。書紀によれば、三十二年崩す御年若干とあつて、御陵については諸陵式に大和國高市郡にあつて、兆城東西四町とある。今の大字平田といふ所で八千四百餘坪ある。

□ 敏達天皇

沼名倉太玉敷の命、他田の宮に、ましまして、天の下拾四歳知ろしめしき。此の天皇、庶妹、豊御氣炊屋姫の命に婚ひまして、生みませる御子、静貝の王、またの御名は、貝鯛の王、次に竹田の王、またの御名は、小貝の王、次に、小治田の王、次に、葛城王、次に、宇毛理の王次に、小張の王、次に、多米の王、次に、櫻井の玄王、(八柱。)又伊勢の大鹿の首の女、小熊子の郎女を娶ひして、生みませる御子、布斗姫の命、次に、寶の王、またの御名は、糠代比賣王、(二柱。)又息長眞手の王の女、比呂

比賣の命に娶ひまして、生み坐せる御子、忍坂日子人の太子、またの御名は麻呂古王。次に、坂騰の王、次に、宇遲王、(三柱。)また春日中若子が女、老女子の郎女を娶して、生みませる御子、難波王、次に、桑田王、次に春日王、次に大股王、(四柱。)

此の天皇の御子等、併せて、十七王坐せる中に、日子人太子、庶妹田村王、またの御名は、糠代比賣の命に婚ひまして、生みませる御子、岡本の宮にましまして、天の下知ろしめし、天皇、次に、中津王、次に、多良の王、(三柱。)また漢の王の妹、大股の王に婚ひまして、生せる御子、智奴の王、次に、妹桑田の王、(二柱。)又庶妹玄王に婚ひまして、生みませる御子、山代の王、次に、笠縫王、二柱、併せて七王、御陵は、川内の科長にあり。

語義 ○沼名倉太玉敷命 即ち敏達天皇の御事である○他田宮 大和國磯部郡纏田村大字太田といふ地○岡本の宮にます云々 舒明天皇の御事○川内の科長 河内國南河内磯長村大字太子の地。この御陵は兆域東西三町、南北三町、三千餘坪。御崩年はわからぬ。

□ 用明天皇

橘の豊日の命、池邊の宮にましまして、天の下三歳知ろしめしき。此の天皇、稻目の宿禰の大臣の女、意富藝多志比賣を娶して、生みませる御子、多米の王、一柱、また庶妹間人穴太部の王に娶ひまして、生みませる御子、上の宮 厩戸の豊聰耳の命、次に、久米の王、次に、植栗の王、次に茨田の王、(四柱。)又當麻の倉首、比呂が女、飯女の王を娶して、生みませる御子、當麻の王、次に、妹須賀志呂古の郎女。此の天皇、御陵は、石寸の掖上にあり。後に科長の中陵に、遷しまつりき。

語義 ○橘豊目の命 用明天皇を申し奉る○池邊の宮 大和國十市郡池上郷○上の宮の厩戸豊聰耳の命 上宮といふのは、書紀に「天皇之れを愛し宮の南上殿に居らしむ。故に其の名を稱して上宮といふ」と解説してある。また厩戸とは、同じく書紀に「皇后懷妊開胎の日禁中を巡行し諸司を監察し馬官に至る。乃ち厩戸に當つて勞せずして忽ち之れを産む」とあるに依つた名である。豊聰耳の聰は利の意で、彼の有名な一度に十八の訴を聞かれた事を申した名で、厩戸の皇子は云ふ迄もなく聖德太子の事である○科長の中陵 これ

は今の河内國南河内郡磯長村大字春日の地。諸陵式には兆域東西二町南北三町。今坪數二千八百餘。

□ 崇峻天皇

長谷部の雀の天皇、倉椅の柴垣の宮にましまして、天の下四歳知らしめしき。御陵は、倉椅の岡の上にあります。

□

語義 ○長谷部の若雀の天皇 とは崇峻天皇の事○御陵 諸陵式に大和國十市郡にあるとあるが、今の磯城郡多武峯村大字倉椅の地である○この天皇は弒せられ給うたのでこれには歴史上一ろくな議論がある。

□ 推古天皇

豊御食炊屋比賣の命小治田の宮にましまして、天の下三十七歳知らしめしき。御陵は大野の岡の上にあります、後に科長の大陵に遷り奉りき。

□

語義 ○豊御食炊屋比賣の命 は推古天皇○小治田 これは大和國高市郡の飛鳥と同地である○御年書紀には「三十六年春二月天皇疾に臥し三月丁未朔壬子天皇疾甚し。癸丑天皇崩す（時御年七十五）即ち南庭に殯す」とある○大野の岡 大和國平群郡にある○科長の大陵 今の河内國南河内郡山田村大字山田の地。諸陵式には兆域東西二町南北二町とある。坪數二千四百坪餘。

この數代の間は、歴史的記述のほかには何等の色彩も見えぬ。蓋し、この記編述の時を去る事遠からずして、なほ人々の記憶に新なる爲でもあらう。また餘りに近き御代の事を云々する事が、編述者として畏多かつた爲でもあらう。吾人は更にいふべき何ものをも持たぬ。

吾人は茲に神代からはじめて推古天皇の御代までその幾年の間であるかを數字的に擧げる事は出来ぬけれども、兎も角もわが上古史の全體を讀み了つたのである。願れば、「天地のはじめの時高天原になりませる神の御名は」といふから今讀了した

\* \* \* \* \*

所までの間には、其の次々に述べた通り、時代の變遷といふ事も、政治の進歩といふ事も、民族の發展といふ事も、明かにした。然しながら古事記そのものに、吾人が心惹かるる所は、何處までもその文學的記述に在る。日本書紀に比して、この記は杜撰であるかも知れぬ。誤脱も存するであらう。けれども吾人のこゝに見る所は、政治史ではない、國民思想の反映たる文學にある。文學的記述は社會に實際起つた事柄とたとへ相反するものがあつても、更にかまふ所でない。たとへ詐らざる國民心理の發露、動搖、次で進歩。これを後世に残した編者の靈筆は、實に三千年來の帝國を保つた大文字であつた。

## 古事記新釋終

## 附 錄

古事記の原本及それに関する古來の著述に就ての研究は井上頼因博士の「古事記考」といふ書物にほとと盡されてあると思ふが、なほ集め得たものを、(第一)原本の寫本、(第二)原本の版本、(第三)註釋其他、の三類に分つて、こゝに掲げる事とした。(未定稿)

寫本

- 一、古事記 眞福寺本 應安四年、名古屋市門前町眞福寺藏、三冊、一名大須本
- 二、同 伊勢本 應永三十一年、上卷一冊、一名應永本
- 三、同 伊勢別本 應永三十三年、上卷一冊
- 四、同 中津本 中津廣呢筆、文政二年、三卷
- 五、同 吉永本 吉永成德藏本、三卷
- 六、同 曼珠院本 故松岡調所藏、三卷
- 七、同 桃木書院所藏本 桃木書院圖書館藏、三卷
- 八、同 學習院本 京都學習院傳來、內閣文庫藏本、三卷
- 九、同 秘閣本 三卷
- 一〇、同 前田家本 前田侯爵家藏本、三卷

- 一一、古事記慶長本 慶長間寫、三卷
- 一二、同 山田本 三卷
- 一三、同 寬永本 寬永十五年、三卷
- 一四、同 元錄本 徳川光圀校、元錄四年、三卷
- 一五、國字古事記 賀茂眞淵訓、一册

板本

- 一、古事記 寬永二十一年、三册
- 二、鼈頭古事記 度會延佳校、三册
- 三、訂正古訓古事記 本居宣長訓 寬政十一年、三册
- 四、新古事記正文 慶應三年、仙臺藩上木、一册
- 五、古事記 三輪田元綱校 明治三年、三册

- 六、訂正古訓古事記 明治三年及四年、京都、永田調兵衛刊、一册
- 七、校古事記 明治八年、徳川氏(名古屋藩)蔵版、三册
- 八、假名古事記 坂田鐵安撰、明治七年
- 九、訓蒙假名古事記 明治七年、大關克、西野古海和解、三書堂發行、三册
- 一〇、神字古事記 藤原政興撰 明治五年、四册
- 一一、校訂古事記 田中頼庸校 明治二十年、三册
- 一二、古事記 正保元年刊、三卷
- 一三、同 長瀬眞幸校 享保三、明治三、三卷
- 一四、譯讀古事記 川上廣樹譯 明治二十六年、三卷
- 一五、校定古事記 本居豐穎等校定 明治四十四年、三册
- 一六、三體古事記 澁川柳次郎 大正六、一册
- 一七、古事記 塚本哲三校 大正四、(有明堂文庫第二輯ノ内)

- 一八、同
  - 一九、同
- 大正六年、(日本國粹全書第七輯ノ内)  
(國史大系第七卷)

### 註釋、其他

- 一、古事記裏書 卜部兼文撰 文政五年版、一册、(神道叢書ニ收ム)
- 二、古事記頭書 賀茂真淵撰 寫本、三册
- 三、古事記傳說 藤原以正撰 寫本、八册
- 四、古事記事跡抄 岡田正利撰 寫本、三册
- 五、古事記標註 上田及<sup>シキブ</sup>淵撰 寫本、三册
- 六、古事記傳 木居宣長撰 版本、四十九册、(宣長全集第一ヨリ三ニ至ル)
- 七、古事記傳附考 加藤澂撰 寫本、三十册
- 八、難古事記傳 橋守部撰

- 九、古事記標註 村上忠順撰 版本、三册、(明治七年刊)
- 一〇、<sup>三國幽</sup>古訓古事記 三國幽<sup>眠</sup>撰 明治八年、三册
- 一一、略解古事記 多田孝泉撰 明治八年、八卷四册
- 一二、古事記通玄解 吳來安撰 明治十一年、三册
- 一三、神代記新解 黑神直臣撰 版本、一册
- 一四、古事記標註 敷田年治撰 明治十一年、七册
- 一五、古事記傳略 吉岡德明撰 明治十六年、十二卷四册
- 一六、傍註古事記 丸山作樂撰 明治十七年、一册
- 一七、古事記講義 佐伯有義<sup>井口隆太郎</sup>撰 明治二十四年、二册
- 一八、古事記講義 大久保初男撰 明治二十六年、三册
- 一九、古事記講義 服部元彦撰 明治二十八年、一册
- 二〇、標註古事記讀本 加藤高文撰 明治二十九年、三册

- 二一、校註古事記讀本 井上頰文撰 明治三十二年、一冊
- 二二、古事記通解 富山亮道撰 明治三十二年、三冊
- 二三、古事記講本 小池貞景撰 寫本、三冊
- 二四、古事記兩傳抄 青柳高綱撰 寫本、一冊
- 二五、古事記序解 龜田長保撰 明治九年、一冊
- 二六、古事記燈 富士谷成章撰 文化五年、二冊
- 二七、古事記神典之略註俚話 寫本、一冊、北邊御杖撰
- 二八、古事記便要 郡珂通高撰 明治六年、二冊
- 二九、古事記年立 本居內遠撰 寫本、一冊
- 三〇、古事記謠歌註 內山眞龍撰 寫本
- 三一、古事記聞書 大國隆正講、門人記 寫本、二冊
- 三二、古事記拾遺集 寫本、四卷

- 三三、古事記姓名索引 藤原輝實撰 寫本、三冊
- 三四、古事記傳頭書 狩谷望之撰 寫本
- 三五、古事記願題歌集 本居宣長編 寫本
- 三六、古事記略註 小野高潔撰 寫本、八卷四冊
- 三七、古事記和歌略註 賀茂眞淵撰 (眞淵全集第二)
- 三八、古事記傳陵墓拔萃 寫本、一卷
- 三九、古事記傳追繼考附錄 茜部相嘉撰 明治十五年、一卷
- 四〇、神代正語 本居宣長撰 三卷三冊
- 四一、辨古事記傳 小野高潔撰 寫本、一冊
- 四二、記紀名物考 寫本、六冊
- 四三、二典神名集附社名舊事紀索引 久米幹文編 寫本、一冊
- 四四、二典姓氏集 久米幹文編 寫本、二冊



- 四五、二典地名集 久米幹文編 寫本、一册
- 四六、紀記歌集 林 諸 鳥 撰
- 四七、紀記索引 寫本、二卷
- 四八、古事記傳首本 居 大 平 文政五年、一卷
- 四九、三大考(古事記傳附卷) 服部中庸撰 天保十五年刊、一卷一册
- 五〇、古事記裏書 尙古攷證閣校 文政五年
- 五一、古事記略註裏書 小野高潔撰 寫本、四册
- 五二、古事記序解 龜田長保撰 明治九年
- 五三、古事記神名略解 加藤高文撰 明治二十九年
- 五四、古事記傳外宮論の辨 足利弘訓 寫本
- 五五、古事記年紀考 菅 政 友 明治四十四年、(菅政友全集)
- 五六、古事記考 井上頼國撰 明治四十二年、一册

- 五七、日本  
神典古事記晰 澁川柳次郎撰 明治四十三年、一册
- 五八、古事記の解説(大國隆正撰 明治二十七年、(一名古傳通解))
- 五九、古事記講義 田山停雲撰 明治四十二年、一册
- 六〇、古事記選釋 千秋季隆撰 明治四二至大正六、(早稻田大學文科講義錄ノ内)
- 六一、古事記讀本 幸田成友訓註 明治四十四年、一册
- 六二、古事記新譯(一名  
我國ノ聖書) 小澤安左衛門撰 明治四十四年
- 六三、標註今文古事記 池田常太郎撰 明治四十四年、一册
- 六四、標註神代記讀本 高山昇撰 明治四十四年、一册
- 六五、標註新譯古事記 松 雲 堂編 大正六年、一册
- 六六、古事記(序文上卷)之研究 美濃部伴郎撰 大正二年、(立國根本之精神ノ内)
- 六七、古事記の性質及び其編述の時代 安藤正次撰 大正六年、(明治聖德紀念學會  
紀要第八ノ内)
- 六八、日本上古史評論 英國チャンバレン著、飯田永夫譯、明治二十一年、(英譯古事記ノ序論)



L'Extreme Orient) の出版物 Ban Zan Shim と云ふ叢書の第四卷に收められて、形はオクタボ、出版地はゼネブ (Geneve) 出版年は一八八〇年である。

第三 にロスニー (L. de Rosny) と云ふ人のやはり佛譯がある。これは佛國の東洋語學校出版物の一部で、形はオクタボ、出版地は巴里、出版年は一八八三年。以上の他にも古事記の一部分については、アストン氏 (Aston) や、フロレンツ氏 (Florenz) などが、これを翻譯し評論したものがあられるけれども、右に掲げた三は重なる單行本である。

天つゝ……………	一六九	天の安の河原にまします……………	二二三	天國押波流岐廣庭天皇……………	四〇三
天なるや……………	一七九	天の安河……………	二一八	天語歌……………	三六一
天の岩位……………	一五〇	天の八衢……………	一四四	天飛ぶ……………	三五三
天の岩靱……………	一五五	天の八十平瓮……………	一三三	天若日子……………	一三〇
天の石屋……………	一三三	天つ神……………	一三三	天飛む……………	三五三
天の浮橋……………	一七七	天つ神の御子……………	一七七	青垣山……………	二六七
天の尾羽張……………	三	天神の御子……………	一八三	青雲の白肩の津……………	一八〇
天の加久矢……………	一三三	天つ神の御子に仕へ奉らんや……………	一五五	青丹よし……………	三四
天の迦古弓……………	一三〇	天神地祇……………	三三三	青和幣……………	五六
天の佐久女……………	一三三	天津日繼知らせ……………	二八九	青葉の山……………	三四三
天の逆手……………	一三三	天つ瑞……………	一九三	阿知吉師……………	二九七
天の鳥船の神……………	一三三	天津麻羅……………	二〇二	阿岐國の多祁理宮……………	一七六
天の波士弓……………	一三三	天下を相譲りたまふ……………	二〇二	阿具知……………	二八八
天の日矛……………	三〇三	天石屋戸……………	五	阿祁訶……………	一五四
天の菩比の神……………	一八	天斑馬……………	五	阿多の小椅君……………	一九九
天の眞名井……………	四七	天照大神……………	四〇	阿多都比賣……………	一七
天の摩羅……………	一〇八	天通岐志國通岐志……………	一四三	阿曇の連……………	四〇
		天地のむた……………	二八〇	阿豆岐野……………	三七三
		天田振……………	三五五	相言へる女子……………	三六三

索引

相易へ給ひき	一六一
相津	三三七
相枕まく	三九五
相議らむ	一六一
相副はして	三二〇
縣主	二四八
縣主殿延の女	三三五
赤加賀知	六五
赤幡を載ち	三八五
赤玉	一七一
吾君問	二二九
吾が祖の國	三〇四
吾婿はや	二六〇
吾兄を	二六六
我勝ぬ	五
朝夕の大御食	二五〇
朝署	二五〇
朝日の直さす國	一五二
朝目よく	一八二
葦芽	一四
葦原色許男大神	二四三
葦原の色許男	八五
葦の盛に散が如かりき	三六二
葦原の醜き小屋	一九九
葦原色許男	七三
足柄の坂下	二六〇
足引の	三五〇
足名椎手名椎	六四
足一つあがりの宮	一七六
足よ行くな	二七〇
東國造	二六一
東の淡水門	二四九
眺へけらく	三三六
眺へたまふ	二五六
穴門豊浦宮	二七五
穴戸神	二五三
穴穂の御子	三五八
淡路の御井宮	二〇五
淡路	二七五
泡さく	一五五
争はず	二九五
争はえじ	三六六
紅紐の帯摺衣	三二七
秋津島	四
足床坐	三七三
潤ずをせ	二八五
浅茅原	三九二
跋くなり	三九二
飛鳥清原	五
遊ばしし	三七四
率寝てむ	三五〇
粟生	一九一
逢坂	二八三
味白梅之言八十禍津のの前	三四九
甜白梅	二四〇
腕ひのみ	一五八
蛇	三七三

雪零り	一五
漢直の祖	二九九
綾垣のふはやが下	一〇〇
年魚	二八一
新玉の	二六三
殯宮	二七八
鮮衣の	三七八
海人なれや	三〇三
あかねつき	九八
あそぶ	三二七
あたら	三三二
あな玉はや	三三〇
あなにやし	一九
あやにな戀きこし	九四
ありたし	九〇
伊牟迦布神	一四四
伊久米伊理昆古伊佐知命	二三〇
伊久米天皇	二七三、二六
伊邪河の坂上	二二八
伊斯許理度賣命	五六
伊勢沙和氣大神	二八四
伊自牟國	四九
伊豆志の八前の大神	三〇六
伊豆美	三二七
伊都	三三
伊都の尾羽張の神	一三二
伊斗村	二八〇
伊那佐の小濱	一三三
伊波禮の麩栗宮	三八三
伊波禮の若櫻宮	三四一
伊賦夜飯	三七
伊余	三五三
伊呂妹	一九
石祝部	二四四
石上穴穂の宮	三五八
石上神宮	三四三
石の上廣高の宮	三九六
石杯の罇	三九四
岩掻きかねて	三三四
出雲國に入りまして	二五五
出雲八重垣	六八
市師池	一三六
市の高處	三〇
市邊の忍齒の玉	三六三
市邊の王	三九二
稻城	二二六
稻置	二四八
五百津賢木	五六
五百箇葉椿	三八
忌人	二〇一
忌矢	三三七
一を得て光宅し	八
況解し易き	九
詐りせず	二七八
嚴白橋	三七〇

櫻井……………三九三  
 赤橋……………三五六  
 入籠は寝ず……………三六八  
 入鹿魚……………二八四  
 い離るゝ……………三七七  
 猪飼……………三六四  
 生剗逆刺阿離清理……………三七八  
 幾だもあらねば……………三三三  
 池邊の宮……………四〇五  
 出で居る故……………一四四  
 犬上君……………二七二  
 銀ひたまはむ爲めに……………二八〇  
 幽顯……………二  
 氣吹……………四七  
 抱きこと無きを……………二八九  
 命はな死せ給ひそ……………一九二  
 言ひ動み……………二五三  
 忌部……………一四八  
 妹を思ひて……………一〇一

---

生大刀、生弓……………八五  
 幾時もあらぬに……………三五六  
 海石……………三九  
 居寂の清泉……………二六四  
 禮物……………三五八  
 郎子郎女……………二八八  
 苛無けく……………三〇二  
 魚隣のごと……………二六一  
 いごのふ……………一八八  
 いたくさやぎて……………一七  
 いさよふ……………二七〇  
 いざさゝは……………二九五  
 いしきあふ……………三三五  
 いしけ……………三三四  
 いしけく……………三三四  
 いしたふや……………一九一  
 いすくはし……………一八八  
 いすすぎ……………一九六  
 いすず……………一四七

---

いつきまつれ……………二二  
 いとこや……………九八  
 いな……………三八  
 いはひべを居ゑて……………二二〇  
 いやをこ……………三九五  
 い行き……………三三五  
 い行きまもらひ……………一九二  
 い椅子たゝして……………三八一  
 いろせ……………一七六

[5]

宇迦の山本……………八五  
 宇迦の御魂の神……………七〇  
 宇岐歌……………三八一  
 宇陀の水取……………一八八  
 宇陀の穿……………一八五  
 宇陀の會通……………三三四  
 宇迦能和紀郎子……………一九二  
 宇迦野……………一九一

宇都志國玉……………七三  
 宇美……………二八〇  
 宇磨志麻遲の命……………一九三  
 宇流鈎……………一六六  
 海が行けば……………二七〇  
 海坂……………二七〇  
 海道……………一七〇  
 海つ路を知れりや……………一七八  
 海幸山幸……………一六〇  
 海部山部……………二九七  
 畝尾……………元  
 畝火の白橋原宮……………一九四  
 畝火山の眞名子谷の上……………二〇六  
 畝火山の北方……………二〇一  
 畝火山……………二〇〇  
 馬婚牛婚……………二七八  
 馬來田……………五〇  
 馬楯……………三五三  
 上の宮の既戸豐聰耳の命……………四〇五

---

上つ瀬下つ瀬……………九  
 氏々名々云々……………三四八  
 氏姓……………三三二  
 打羽ふり来る人……………一七八  
 打はへ……………一四〇  
 打成す……………一三四  
 味洲路……………一五一  
 味師内宿禰……………二二  
 浮締りそりたして……………一五一  
 浮立けて……………二九  
 占へ度して……………五  
 トに合へり……………二四〇  
 空筒伏せて……………五七  
 新狩……………二八三  
 臼に立て……………二八五  
 蛆たかれとろろぎて……………三  
 牛を放ち馬を息へ……………五  
 誓華にさせ……………二六七  
 免す河……………三三八

---

碓女……………一六  
 轉あり……………五三  
 歌垣……………三八七  
 嘘き……………三七四  
 樂す……………三九五  
 打みるかきみる……………一〇〇  
 内色許賣命……………二二  
 菟上王を返して……………二四二  
 木國……………五〇  
 諾なく……………二六三  
 蛤貝……………七九  
 浦すの鳥……………九三  
 結友して……………二五八  
 うきゆひ……………一〇一  
 うけひまをしむ……………二四〇  
 うさゆづる……………二八三  
 うたて物言ふ……………三六三  
 うちわたす……………三八  
 うちやめこせね……………九一

うつはぎにはきて……………一〇八  
 うつぬき……………五八  
 うなかける……………一〇三  
 うながぶし……………九八  
 うながせる……………一三九  
 うはなりねたみ……………九七  
 うべしこそ……………三三七  
 うら恥し……………一七〇  
 うるはしき友……………一三九  
 うれたくも……………九一  
 うれつく……………三〇八

【え】

吉野河の河尻……………一八五  
 吉野の宮……………三三二  
 兄宇迦斯弟宇迦斯……………一八六  
 兄師木弟師木……………一九三  
 恵貞の長枝……………三四九  
 咲く酒……………二九九

【お】

小碓命……………二四八  
 小竹の菊杖……………二六九  
 小楯連……………三三五  
 小楯ろかも……………二九一  
 小津……………二七二  
 小野……………二五八  
 小長谷の若雀の命……………三九八  
 小櫛の……………三四四  
 小濱に論て……………四  
 小治田……………三六〇、四〇六  
 小牟漏が兵……………三七三

押機……………一八六  
 押木の玉纒……………三五八  
 落ちず……………一〇〇  
 落ちなづさひ……………七八  
 弟……………一七一  
 弟橘比賣命……………二七三  
 弟王……………三〇三  
 淤岐島……………七六  
 淤煩釣……………一六六  
 袁本杵の命……………四〇〇  
 袁祁の石巢別命……………三九三  
 大猪子が腹……………三三六  
 大臣……………二七四  
 大峽……………三五五  
 大神……………一三三  
 大后……………一九六、三二二、二四四  
 大王……………三三三  
 大君ろかも……………三三三  
 大日下王……………三五八

大國魂……………一三三  
 大國主の神……………七三  
 大口の尾翼……………一四一  
 大久米命……………一八六  
 大氣都比賣……………一四四  
 大阪……………二九九、三四三  
 大坂神……………三三三  
 大阪戸……………三四〇  
 大雀皇帝……………一〇  
 大雀の命……………三二二  
 大匠……………三六七  
 大帶日子淤斯呂和氣天皇……………一四六、三三二  
 大年の神……………七〇  
 大伴の連……………一五一  
 大稱和氣命……………二七九  
 大穴牟遲の神……………七三  
 大なる敷……………一六六  
 大管……………五三  
 大野の岡……………四〇七

大長谷の命……………三九四  
 大長谷の若建の命……………三六五  
 大量……………一二九  
 大魚よし……………三八八  
 大前小前の大匠……………三三三  
 大鏡……………三四四  
 大命を請しひかば……………二九四  
 大御酒の柏……………二九五  
 大宮の云々……………三八七  
 大御水……………三三九  
 大宮よりいえます……………三八八  
 大倭帶日子國押人命……………三〇八  
 大湯座の若湯座……………二七七  
 大倭根日子子國玖琉命……………二二二  
 大倭日子鈕友命……………三〇六  
 大倭日子子賦斗通命……………三〇九  
 大屋毘古の神……………八一  
 男淺津間若子宿禰の命……………四七  
 凡河内國……………五〇

己が幸て……………一六一  
 多き少き……………七六  
 息長帯比賣命……………二八、二七五  
 招撫し……………一四六  
 奥つ島……………一七三  
 童男……………三六〇  
 後れるたる倉人女の船……………三三三  
 他田宮……………四〇四  
 治めたまへ……………三三六  
 伯父……………三三七  
 食國の政……………二八九  
 駿の欄……………二六三  
 強……………三三三  
 音を以て連れ……………九  
 織女……………二六七  
 媛女に直に……………一九八  
 重みし給ふ……………三三六  
 臣、連……………三六二  
 宮内にまゐる……………一九八

祖神……………七〇  
 上通下通婚……………二七六  
 自らまゐり出で……………一七〇  
 溺れし時の種々の態……………一六八  
 をえまして……………一八二  
 おして……………三三〇  
 おすひ……………三三〇  
 おそぶらひ……………九  
 をだて……………三三四  
 おとたなばた……………一九九  
 おのころ……………二七  
 おひと(首)……………六  
 おほきさき……………九七  
 おもほてり……………一九九  
 おれ……………一八六  
 おれ熊曾建……………二五三  
 おろす……………三三三

【か】

神倭伊波禮毘古天皇……………二〇一  
 神倭伊波禮毘古天皇……………一〇  
 神倭伊波禮毘古の命……………一七三  
 神風の……………一九三  
 神洲衣……………五三  
 神沼河耳命……………二〇二  
 神壯夫……………三三三  
 神牀……………三三三  
 神託り……………二七八  
 神度劍……………一九九  
 神やらひ……………四三  
 神八井耳命……………二〇二  
 神の氣……………三三三  
 神の御腹……………二七八  
 河鷹……………一八六  
 河内惠賀之長江……………二八六  
 河内の多治比の高願……………三八一  
 河内の古市の高屋村……………四〇〇

河のまに……………三三三  
 河俣毘賣……………二〇四  
 川内惠賀之裳伏岡……………三〇九  
 川内の科長……………四〇四  
 膳夫……………一四〇、一七〇  
 膳之大伴部……………二四九  
 勝門比賣……………二八一  
 勝さび……………三三  
 還り立ちて……………二八三  
 還り上りませる時……………二八五  
 枯らが下樹……………二九六  
 枯野を鹽に焼き……………三三九  
 枯野……………三三九  
 韓神……………一一三  
 韓園……………一五三  
 韓鍛……………二九七  
 白橋生……………二九六  
 白橋原媛女……………三七〇  
 片鹽穴宮……………二〇五

片岡の石杯の岡……………三九八  
 苜羽井……………三六四  
 苜蓿……………三五〇  
 迦久の神……………一三三  
 迦毛……………一四〇  
 柯を連れ……………八  
 訶和羅前……………三〇二  
 香山……………二九  
 香ぐはし……………二九五  
 鏡をかけ……………二  
 隠りましき……………一三八  
 緞八綬……………二四四  
 惶みまして……………二五三  
 春日之伊邪河宮……………二二四  
 風のむた……………二二六  
 掠ひ取りて……………二二六  
 堅石……………二九九  
 片岡馬阪上……………三〇  
 潜き息衝き……………二九

堅魚をあげて……………三六七  
 金門藤……………三三三  
 姓を正し氏を撰て……………五  
 頭衝く眞日には當てず……………二九二  
 返り参上りて……………一四一  
 役氣……………三三三  
 臭韭一もと……………一九一  
 蒲生……………五〇  
 蚊屋野……………三九二  
 空船……………二八三  
 柄……………一四〇  
 鎌りて……………一四〇  
 上下の衣服を避け……………三〇八  
 上毛野下毛野……………二九  
 上菟上國……………四九  
 上とあるべからず……………二〇一  
 輕之塀原宮……………二二  
 輕の酒析池……………三八  
 輕鳥の明宮……………二八八

輕之境岡宮……………二〇六  
 輕池……………二二九  
 葛城の高岡宮……………二〇四  
 葛城室の秋津島宮……………二〇八  
 葛城披上宮……………二〇七  
 葛野……………二二九、二九一  
 かがなへて……………二六一  
 かきまみる……………一七〇  
 かぎろい……………三三三  
 かく寄り來ね……………三三三  
 かしこけれど……………三三三  
 かしこし……………一三三  
 かたしは……………一五八  
 かつがつも……………一九八  
 かぬち……………一五八  
 がね……………三三三  
 かの后……………二二三  
 かへりまして……………二六六  
 かみごと……………一〇三

かもがと……………二九二  
 かれ……………一七  
 がり……………一九八  
 かれ此の神……………三〇八  
 かれ人民富めり……………三六六  
 かれ申すと申し給ひき……………一五八  
 かんがかり……………一七〇

【80】

木の國……………八一  
 木戸ぞ披戸……………二四〇  
 君待ち難に……………二六三  
 君が行……………三五五  
 吉備……………一七六  
 吉備人……………三三〇  
 聞こしもちをせ……………二九六  
 鬩貝比賣……………七九  
 后たち……………二六九  
 氣診……………一五

【81】

國思はして……………二六七  
 國定めたまへり……………二七五  
 國避りまつる……………七六  
 國の神……………六四、四四、一七八  
 國の大幣……………二七八  
 國の大祓して……………二七八  
 國の幸……………一八五  
 國造……………二四八

國の宮……………二九一  
 國わかく……………一四  
 草薙劍……………二五六  
 草薙の大刀……………二七  
 日下江の入江の蓮……………三七一  
 日下の直越の道……………三六七  
 日下の高津池……………三三一  
 日下の蓼津……………一八〇  
 尿まる……………五二  
 尿戸……………二七八  
 熊曾建……………二五三  
 熊野村……………一八二  
 久米の子……………一九〇  
 久米の直……………一五一  
 頭椎石椎……………一九〇  
 頭椎の太刀……………一五一  
 黒櫛……………二四三  
 黒崎……………三八  
 黒田廬戸宮……………二〇九

吳床にませて……………三〇三  
 吳原……………三六五  
 吳人……………三六五  
 吳服……………二九七  
 皇輿忽ち駕して……………五  
 皇帝陛下……………八  
 久須婆の渡……………三三七  
 久延昆古……………一〇八  
 玖須婆の河……………三六四  
 櫛名田比賣……………六四  
 櫛八玉の神……………一四〇  
 藏の官……………三四五  
 倉崎山……………三三四  
 探湯瓮……………三三九  
 酒の上……………二八五  
 腐して……………三三六  
 下りましき……………二六九  
 機香……………三〇八  
 百濟國……………二八〇

口ひびく……………一九一  
 歴木……………二八三  
 隱所……………二〇  
 雲居……………二六七  
 悔しきかも……………三三  
 水母なす……………一四  
 畔……………五三  
 化熊瓜を出て……………四  
 訓に因りて……………九  
 くえはなちやりて……………二九  
 くきのがる……………八一

【82】

毛の糞物……………一〇  
 毛の柔物……………一六〇  
 乾坤……………二  
 乾符……………七  
 玄扈……………八  
 軒后……………七



服せり……………三三六  
 氣多の前……………七六  
 氣比大神……………二八四  
 今日もかも酒水漬らし……………三六一  
 け長くなりぬ……………三五五

【2】

言擧げ……………二六四  
 言をこそ……………三五四  
 言立は足もあかがに……………三三八  
 言向け和し……………三二〇  
 言むけやはし……………一九四  
 言よさす……………一七  
 高志……………一四七  
 高志の國……………一四〇  
 高志道……………三三三  
 高志前角鹿……………二八四  
 海鼠……………一五五  
 海尊……………一四〇

腰袋けせる少女……………三五五  
 腰煩む……………二九  
 木鏡……………三六  
 木幡村……………二九  
 木花佐久夜姫……………一七  
 衣の袴をとりて……………三五  
 衣の欄……………三三  
 子の一つ木……………二九  
 子代……………三三  
 心をたにか……………三六  
 心を寛み……………三六  
 事戸をわたす……………三七  
 事の語りごと……………三三  
 事よさす……………四  
 鴻基……………七  
 是しも綾に畏し……………三九  
 詐刀……………三五  
 答へ申せるさまも……………三七  
 樹の間よも……………一九

古波陀……………二九五  
 乞ひかへす……………一三六  
 金波鎮漢紀武……………三四八  
 死刑……………三五五  
 混元……………二  
 こきしひえね……………一八八  
 こしよろし……………九八  
 ことをこそ……………三三  
 この蟹や……………三九  
 このかみ……………二五、二八  
 この道……………三三  
 こはや……………三五  
 こもりくの……………三五  
 こもりづ……………三一  
 これはふさはず……………九八

【30】

沙本……………二二六  
 沙本……………二二六

沙紀之多他那美……………二七四  
 沙沙那美……………二八三  
 沙庭……………二七  
 狭井河よ……………一九八、二〇〇  
 狭木の寺間陵……………二四  
 狭霧……………四七  
 狭山の池……………三三  
 佐佐宣王……………四〇〇  
 佐那縣……………一四七  
 佐那葛……………三〇  
 佐波遲比賣命……………三〇  
 佐比持……………二六六  
 眞寢の……………三三〇  
 眞身無し……………二五六  
 眞寢てむ……………二六三  
 阪の御尾……………八五  
 坂手池……………二四九  
 三神……………二  
 三に通じて……………八

定めて……………二四九  
 定めたまひき……………二七  
 幸からむ……………一五八  
 幸からじ……………一五  
 棹取りに……………三〇三  
 槁を指し度し……………一七八  
 境を定め……………四  
 酒樂の歌……………二八六  
 賢し女……………九〇  
 酒折宮……………二六一  
 鷺巢池……………三四〇  
 先に御食せし……………二六六  
 覺し白したまはく……………一八五  
 里人もゆめ……………三三  
 塞へて入れざりき……………三〇六  
 侯ひ待てば……………二九  
 媛女の君……………一四八  
 さかさまにせき上げて……………三三  
 相武國……………三七

裂ける利目……………一九八  
 驗しみと……………三三  
 さがみにかむ……………四七  
 さかりに……………一七〇  
 さくくしろ……………一四六  
 さしまき……………一〇一  
 さしぶ……………三三  
 さしぶのき……………三三  
 さずき……………六五  
 さづこ……………三八  
 さ野つ鳥……………九  
 さねさし……………二五八  
 さ蠅なす……………四三  
 さや……………一四一、二九六、三三九  
 さわ……………三八

【し】

後舉歌……………三五〇  
 後手にふきつ……………三五

鳥つ鳥……………一九二  
 島の速餐……………一五五  
 師木縣主……………二〇四  
 師木津日子玉手見命……………二〇五  
 師木水垣宮……………二一九  
 知……………八五  
 知らにと……………三三五  
 知らまくほりて……………三三三  
 科長の大陵……………四〇七  
 科長の中陵……………四〇五  
 科長の坂神……………二六三  
 白髮大倭根子の命……………三六三  
 白き犬……………三六八  
 白智鳥……………二六九  
 白鳥御陵……………二七〇  
 白和幣……………三六八  
 鹽を焼く……………三三九  
 鹽椎の神……………一六一  
 鹽盈珠……………一六六

鹽乾珠……………一六六  
 下堅く上堅く……………三八一  
 下聘……………三五〇  
 下泣……………三五〇  
 下泣に……………三五〇  
 下籠を走しせ……………三五〇  
 志賀高穴穗宮……………二七四  
 志幾の大縣主……………三六八  
 志許米……………三八  
 志比の臣……………三六七  
 志米須……………三九二  
 周王……………七  
 繁國……………元  
 鳴はさやらず……………一八八  
 紫辰……………八  
 静歌の返歌……………三九  
 日月目を洗ふ……………二  
 鮎が鱗手に……………三八八  
 人事共に冷く……………五  
 潮瀬の波折……………三八八

新羅國……………二八〇  
 汁の滑……………三〇一  
 淡辰……………五  
 神理……………七  
 しが(備)……………一六  
 しが下に……………三三  
 したよ……………三二  
 しづまります……………一〇一  
 しりくめなは……………五九

【す】

墨江大神……………二八〇  
 墨の江の津……………三四  
 墨の江の三前の大神……………四〇  
 既に珠を貫けるが如く……………四六  
 既に童女の姿……………三五  
 菅原の伏見岡……………五九  
 須賀之八耳神……………六八  
 少名毘古那……………一〇八

須々釣……………一六六  
 取魚……………一三三  
 洲羽の海……………一三六  
 周芳……………五〇  
 凡て朝廷の人たち……………三八八  
 すくすくと……………二九一  
 すぶく……………八五

【せ】

姓の日下……………一〇  
 聖帝……………四  
 先聖……………二  
 潜龍元を體し……………五

【そ】

底つ岩根……………八五  
 底度久……………一五四  
 底筒男中筒男上筒男……………二七八  
 其の兄なる子……………三〇八

其の枝……………三五〇  
 其の河……………三八一  
 其の後……………二五八  
 其の將軍……………二八三  
 其の宮……………三三  
 俗を焚め……………七  
 衣通郎女……………四七  
 曾富理神……………一三  
 熟芥……………三五  
 空みつ……………三七  
 虚空津日高……………一六三  
 そぎをりとも……………三三〇  
 そじし……………一五一  
 そたゝき……………一〇一、九三  
 そに鳥……………九八  
 その緒……………三五  
 そのかみ……………三六〇  
 その子……………二六七  
 その鼓……………二八五

【た】

その玉たち……………三五  
 そめ木……………九八  
 それの奴……………三五  
 それより後……………一六八

高城……………一八八、三六  
 高倉下……………一八二  
 高島宮……………一七六  
 高千穗宮……………一七三  
 高千穗の久士布流獄……………一五一  
 高光る……………二六三  
 高比賣……………二九  
 高御集日神……………一七  
 高安山……………三八  
 高行くや……………三三  
 高住く鶴が音……………三九  
 建小廣國押橋命……………四〇  
 建内宿禰……………二二

建沼河別命	二二三
建波邇夜須昆古	二二三
建比良鳥の命	四九
建部君	二七三
建御雷の神	一三三、一三七
玉垣宮	三三〇
玉劍	三三五
玉倉部	二四四
玉手岡の上	二〇八
玉矛	一七
玉緒	三三六
玉の祖命	五八
玉のみすまる	三三九
玉津寶	三〇六
玉器	一六三
珠を吐きて	二
球二貫	三〇六
手打	三〇六
手跡に	三三三
手力男神	二四六
手上	一八七
手末の調	三三六
手人	三九七
手纏	三六
手俣よりくきし	二〇八
手弱腕	二六三
田中の直	五〇
田人	三〇三
田部	三〇九
立紫竹健にはるねず	三六九
立ちか荒れなむ	三三一
立氷	一八
當岐麻道	三三三
當藝野	三三五
多賀	四三
多藝志の小濱	二四〇
多藝志美々命	一九五
多具理	三六
多治比の柴垣の宮	三六六
多遲摩國	三〇六
多遲比野	三三一
楯矛祭り	三三三
楯並めて	一九三
壘	一六三
壘ども	二六七、二六八
大刀が結	九
刀合さむ	二五六
易刀せむ	二五六
桶豐目の命	四〇五
桶の小門	三八
誰をしまかむ	一九八
誰が料るかも	三三三
唯ぞしぬふく	一五六
赤海鯉	一六六
箏	三五
舵の形	二六五
頂爰	二八三

栲繩	一四〇
幼壁	三四一
直に向へる	三六六
糞地	三四五
且波	二四
淫くる	一〇〇
平ぎき	三〇八
廻ひて	二五八
討殿	七
帶中日子天皇	二七五
たくぶすま	一〇一
たくづぬの	九三
たしく	三五〇
たしなみて	三三七
たゞには告らず	三四二
たゝなづく	二六七
たゞきまながり	一〇、九三
たちそばの實	一八八
たてまだしき	一五六
たてまつらせ	一〇八
たなすゑ	一五六
たにくゞ	一〇八
たまきはる	三七七
ためつもの	六一
【ち】	
千秋の長五百秋	二七
千位置戸	六〇
千五百	三五
千早人	三〇三
千早振	三〇三
千葉の	二九一
千尋繩	一四〇
千引石	一三六
近つ淡海	四
近淡海の御上祝	二六
近飛鳥	三四四
近飛鳥宮	三九二
血沼の池	三三一
血沼の海	一八〇
智海心鏡	七
知知都美	二〇五
道速振	一八
道速振る神	二五七
ちぎり竟へて	一九
【こ】	
兵	三六三、三四三
兵を藏めてき	二八三
都夫多都	一五五
都奴賀	二八四
都牟刈の大刀	六五
築紫阿志比宮	二七五
筑紫の君石井	四〇〇
夫妻隠み	六八
妻まぎかねて	九〇
妻持せらめ	一〇〇

劍池の中岡の上……………三三  
 杖衝飯……………二六六  
 楓弓の伏やりこやり……………三五五  
 術田岡……………二〇四  
 菅田……………五三  
 月讀命……………四〇  
 津島……………五〇  
 土雲八十建……………一九〇  
 堤池に役だたせて……………二九七  
 筒木……………三四  
 綴喜の宮……………三四  
 黒葛多まき……………三五  
 恒に長眼を經しめ……………二四九  
 遂に知らさむ……………三三七  
 爪櫛……………六五  
 罪の類を種々求めて……………二七八  
 つぎねふ……………三三  
 つま……………三三

つらゝく……………三八  
 つるぎの太刀……………二六七  
 手間の山本……………七六  
 帝紀……………七  
 てへり……………八  
 照りいまし……………三三  
 天乙……………八

【と】

鳥取部……………二四三  
 鳥取の河上宮……………三三一  
 鳥の遊……………一三三  
 常世國……………二四四  
 常世にもがも……………三七二  
 常夜住く……………五六  
 地得ぬ玉作……………二二六  
 地をあたらし……………五三  
 詛……………三〇八  
 詛戸を返さしめ……………三〇八  
 登美毘古……………一九一  
 登美能那賀須泥毘古……………一八〇  
 十拳劍……………六六  
 十掬劍を抜きて……………一三三  
 斗賀野……………二八三  
 利鋒に眞渡る杖……………二六三  
 非常香葉……………二四四  
 蘇葛……………二六九  
 歳大梁に次り……………五

乏しきろかも……………三七一  
 取しで……………五六  
 外つ宮……………一四七  
 伴の緒……………一四五  
 遠飛鳥……………三四四  
 鞆なせる穴……………二七五  
 殺る……………三五  
 とをを／＼に……………二四一  
 とことはに……………二六〇  
 とこよ……………〇八  
 とだる……………一三七  
 どよむ……………九一

【な】

泣きいさちき……………四三  
 泣澤女……………二九  
 泣女……………二六  
 鳴鐘……………一八六、一三三  
 鳴女……………一三三

難波江……………三四  
 難波の埼よ……………三〇  
 長鳴鳥……………五六  
 汝が庶兄……………三七  
 汝が命……………二七八  
 汝が御子や……………三七  
 汝物……………四八  
 那勢命……………三三  
 那良戸……………一四〇  
 那良の山々……………三三  
 那良山……………三〇二  
 中臣……………一四八  
 易名の幣……………二八四  
 詠言……………三九五  
 藤附き田……………二六九  
 夏草の……………三五四  
 浸漬の木……………三九  
 七媛女……………一九八  
 猶東のか……………一七六

【に】

直毘……………三九  
 生手に……………二七八  
 浪速の渡……………一八〇  
 振浪比禮切浪比禮……………三六  
 波の穂……………一〇八  
 な動し給ひて……………一五三  
 なかさだめる……………三五五  
 なが言へせこそ……………三三八  
 なすや板戸……………九一  
 なぞも恃もしげなく……………三六〇  
 などりにならむ……………九三  
 なにも……………二九  
 なね汝が命……………二〇〇  
 贅持の子……………一八五  
 丹畫きつけ……………三六  
 二雲……………二  
 二氣……………七

錦色なる小蛇……………三六  
 西の方に國あり……………二七  
 通藝速日命……………一九三  
 丹塗矢になりて……………一九六  
 水波……………三七  
 新治筑波……………二六一  
 仁蕃……………二九九  
 鳩鳥……………二八三  
 庭雀うずすまり……………三八一  
 新室巢……………二五三  
 新巢……………一四〇  
 庭つ鳥かけ……………九一  
 にこやが下……………一〇一  
 にしふきあげて……………三〇〇

【ぬ】

沼河比賣……………九〇  
 沼名倉太玉敷命……………四〇四  
 鐸……………三九二

【ぬ】

額田部湯坐連……………五〇  
 尊繰り……………二九五  
 盗み出て……………三四一  
 治しつ……………二二六  
 ぬえ草の女……………九二  
 ぬなともゆらに……………四七  
 寝しくをしぞも……………二九五  
 根白の白きたぐむき……………三六  
 根の堅洲圖……………四三  
 禱ぎ申す……………一四〇  
 ねぎ教へ覺せ……………二五〇  
 ぬ……………一六六  
 後もくみねむ……………三六八  
 能須野……………二六七  
 稽首……………一六八

【の】

延へけくしらに……………二九五  
 濱つ千鳥……………二七〇  
 早く崩りましぬ……………三〇三  
 速坂門……………一七八  
 驛使……………三三三、三三七、三五五  
 榛の木……………三七四  
 萬神蕃息す……………二  
 はいもとほらふ……………一九二  
 はかりごつ……………一〇〇  
 はしく思はして……………八五  
 はし妻……………三五  
 はしけやし……………二六七  
 はたゞぎも……………九八  
 はたる……………一六六  
 ははか(朱櫻)……………五六  
 はや……………三三五

【は】

能美の御幣物……………三六八  
 宜りごちて……………一七  
 のみど……………一六六  
 波多勢平群……………二二三  
 波通賦阪……………三四三  
 波々矢……………一三〇  
 針間……………三六四  
 針間の志自牟が家……………三八九  
 針間の氷河の前……………二二〇  
 長谷の列木宮……………一九八  
 長谷の朝倉の宮……………三六五  
 長谷部の若雀の天皇……………四〇六  
 匍匐しぐまひて……………三七七  
 匍匐云々……………三八  
 葉廣能白橋……………二四〇  
 葉廣……………三三三

八荒……………七  
 作人……………一五八  
 羽挾の山……………三三三  
 梯立……………三三四  
 椅本……………二五三  
 走水海……………二五八  
 秦造の祖……………二九九  
 鱒の廣物狭物……………一五五  
 膚もあたゝけきに……………三三五  
 恥みす……………三四  
 初國知らし……………二三八  
 流まゝりき……………三三三  
 齒並菱なす……………二九二  
 埴……………二四〇  
 赤土を床の邊に散らし……………三三三  
 土師部……………二四四  
 祝……………二四二  
 喪貝……………八五  
 婆布理曾能……………三七

【ひ】

日浮て暉を重ね……………八

日枝の神……………二二五  
 日子……………一四三、一七〇  
 日子坐王……………二四  
 日の御子……………二六三  
 日に吞きて……………二六八  
 日向笠繁……………三八  
 日女鳥……………三七七  
 一言主大神……………三七六  
 一尋和通……………一六六  
 一道……………二七八  
 ひか……………二七八  
 控して……………二七八  
 控き出して……………一八七  
 比比羅木の八尋矛……………二六六  
 比賣基曾神社……………三〇四  
 比良坂……………三五  
 比良夫貝……………一五四  
 引き退け給ひて……………三五五  
 引き塞へ……………三七  
 引田の若栗栖原……………三七

肥の河……………三六  
肥河に沐したまひき……………三五  
氷目矢……………八一  
氷椽……………八五  
梭……………五三  
燧白燧杵……………四〇  
楡桐の隠入野宮……………四〇  
久方の……………二六三  
菱殻の刺しける……………二九五  
聖帝……………三七  
養しまつらめ……………三七  
焼火少子……………三六五  
等族の下帯……………三六  
太……………二四七、二八三  
人の心疑はしきに因りて……………二八三  
弱細……………二六三  
雲雀……………三三三  
夷ぶり……………一三〇  
紐大刀……………一五五

東の方十二道……………三五  
葉盤……………二七六  
ひかげ……………五七  
ひけ鳥……………九九  
ひこずらひ……………九九  
ひたつかひ……………二四  
ひむし……………二〇八  
ひりひ……………三五

袋を負はせ……………七六  
布運葛……………三〇八  
太卜……………三〇四  
府空しき月無し……………八  
冬木のす……………三九六  
櫛を列ねて……………四  
風猷……………五

蛇を切り……………二  
へみ……………八五  
へみの比禮……………八五  
へそ……………三三  
へつなみ……………九八

品太天皇……………三九八  
品陀の日の御子……………二九五  
品陀の御世……………一〇

【五】

【六】

【ほ】

品陀和氣命……………二八八  
品運部……………二四〇  
矛八矛……………二四四  
矛ゆけ……………一八七  
本教……………二  
本辭……………七  
蜂を列ね……………八  
祝歌の片歌……………三七  
齋狂ほし……………二八五  
火須勢理の命……………一五八  
歩驟各異に……………五  
秀辯……………二八一  
ほつもり……………二九五

眞魚昨……………一四一  
纏かすけばこそ……………三六  
纏向の……………二七八  
纏向の日代宮……………二四六  
枕かむ……………二六三  
枕ぎて……………二三八  
茨田……………三三  
茨田下連……………二四八  
悪事も一言……………三七六  
勾の金箸の宮……………四〇〇  
目交して……………八一  
正勝……………四七  
全けむ……………二六七  
股……………一〇一  
待つに待たじ……………三五五  
未羅縣の玉島の里……………二八一  
無間勝向……………一六  
鶴領尾行合へ……………三八二  
幣ひしつ……………三〇四

前の殿の戸……………三〇六  
庶兄……………一〇〇  
守護人……………一六八  
眉畫き濃に畫たれ……………二九二  
目弱玉……………三五九  
まかたち……………一六三  
まがれ……………三三  
まき通り……………一五一  
まきて……………五六  
まけし……………二二七  
まけの政……………二九八  
きけるあをな……………三三〇  
まさき……………五七  
まさつこ……………三八  
ませまへり……………二四二  
また頻きて……………二五六  
また長にいはなきむ……………九四  
また昔……………三〇四  
まちいなる……………一八〇

【六】

まつぶさ……………九六  
まほろば……………二六七

**【み】**  
御舎……………二四〇  
御馬甘……………二八〇  
御母……………三三七  
御祖……………二〇〇、二二六  
御饗……………三三三  
御門の神……………一四七  
御饗御額に結はせり……………二五三  
御糴……………二六〇  
御倉板擧之神……………四二  
御頸珠……………四一  
御言とはず……………二二九  
御津崎……………三三三  
御杖……………二八〇  
御綱……………三三三  
御寝可あははして……………二八六

御名代……………三三四  
御葬に歌ひたりき……………二七〇  
御陵を作りて……………二五八  
御陵の戸……………二四四  
御火焼の老人……………二六一  
御囊……………二五六  
御大の御前……………二〇八  
御眞津日子訶惠志泥命……………二〇七  
御眞木入日子印惠命……………二一九  
御前の事……………一四六  
御美豆良……………三三  
御諸山……………三三三  
御諸の山……………二二一  
御室の築くや……………三七一  
美智の皮……………一六三  
美努村……………三三三  
美豆の小佩……………二七〇  
美蕃登……………二〇、二八  
美夜受比賣……………二七〇

美和河……………三七一  
美和の大物主神……………一九六  
美和山……………二二三  
三川の穂別の祖……………二二八  
三國君……………三〇九  
三島……………一九六  
三栗……………二九一  
三野……………二四九  
三柱の貴子……………四一  
三重村……………二六六  
三重の勾……………二六六  
三重の采女……………三七八  
三室……………三三六  
三宅連の祖……………二四四  
三勾……………三三三  
水を掌る……………一六六  
水淳る……………二九五  
水齒別の命……………三六六  
水穂……………二一七

水戸の神……………二四〇  
見かしこむ……………三四  
見放け……………二九一  
見立……………一九  
見ゆれば五十隠る……………三六五  
道臣命……………一八六  
道尻岐閉……………五〇  
道の口……………二二〇  
宮上り……………三三四  
宮人の云々……………三五三  
屯家……………二四七、二七五、三六三  
命や……………一〇〇  
盈ち乾……………三〇八  
課役……………三三六  
彌豆麻岐……………二一四  
寝ねませらむを……………二二六  
妣の國……………一七三  
沖し遣り……………二六〇  
妾の御子……………二二六

みこともちて……………二七  
みたにふたわたらす……………一三〇  
みつゝし……………一九〇  
みてぐら……………三三三  
みなことをろくに……………三七八

**【む】**  
胸形……………四九、一〇四  
嫡比賣……………八五  
向火……………二五七  
牟宜都……………二四九  
牟邪志……………四九  
正身……………二六四、三六三  
徒手……………二六四  
頂……………五三  
むしぶすま……………一〇〇  
むなちかきいで……………五七  
むな見る時……………九八

海布……………一四〇  
面黥る老人……………三六四

**【も】**  
百枝槻……………三七八  
百たらず……………一三八  
百千足る家庭……………二九一  
百傳ふ……………二九一  
百取の机代の物……………一五八  
毛受……………三四五  
毛受野……………三四六  
毛受の耳原……………三三九  
物思はしめたまひき……………二四九  
物部の……………三六五  
本方末方……………三〇三  
本つ土……………二四三  
本劍……………二九六

賣……七  
 祿さには……三三  
 水取司……三三  
 母由良……四三  
 諸縣……二九四  
 もこよひき……一七一  
 もと難波の宮……三四一  
 もはらあらはし……一五四  
 もひもをほどにおしたれき……一七七

【や】

八上比賣……七六、六六  
 八雲たつ……六六  
 八雲刺す……二五  
 八鹽折の酒……六五  
 八鹽折の紐小刀……二二六  
 八島土奴美の神……七〇  
 八十神……七六  
 八十毘良迦……一四〇

八十友の緒……三四九  
 八十桐手……一八  
 八田間の大室……八五  
 八田の一本菅……三三  
 八田皇女……三三  
 八咫鳥……一八五  
 八千矛の神……七二、九〇  
 八日の荒籠……三〇八  
 八拳鬚……四三  
 八拳たるまで……一四〇  
 八拳鬚心前に至る……三三九  
 八尋殿……一九  
 八重垣……六六  
 八百土よし……三七八  
 八俣の大蛇……六四  
 山海の政……二八九  
 山がた……九八、三〇  
 山代……二六、三三  
 山代國の相樂……二四四

山高み……三五〇  
 山田のそほど……二〇九  
 山と……九  
 山神河神……二五三  
 山のたわ……二四二  
 山の三尾の竹を……二六  
 山の尾……七六  
 山邊の道上……二七三  
 山邊道勾の岡上……三三八  
 山部の大楯の連……三三九  
 倭男具那命……二四六  
 倭し……二六七  
 倭の滝知……五〇  
 倭の國に上りまさん……九七  
 倭比賣命……二二、三三  
 安國造……二七二  
 安萬侶……二  
 安見し……三七三

安見し吾大君……二六三  
 安の河に議て……四  
 矢……八一  
 矢刺……一八七  
 矢刺して……三〇三  
 箭の内の内……三三三  
 奴ながら……三六八  
 奴御末……五八五  
 奴や……三六八  
 焼遣……二五七  
 やが榮えなす……三三八  
 やが榮えなす……三三八  
 不平みますらし……一八二  
 休はしめ……二二六  
 笠……一八五  
 やまとへ……三二〇  
 懶猪……三七四  
 やゝに歩み……二六六

【ゆ】

湯津石村……三〇  
 湯津香木……一六一  
 湯津楓……一三三  
 弓端の調……三三八  
 夢に覺りて……四  
 夢の歌をきゝて……五  
 由良の門……三三九

【よ】

依網池……三三八、三四  
 黄泉國……三三  
 黄泉戸奥……三三  
 識す……三五八  
 吉野の國主……二九五  
 歸せたまはむ……二七八  
 四拜……三五八  
 世の長人……三七  
 仕丁……三三  
 讀歌……三五六

【り】

よさす……一七  
 よくをさむ……二二  
 よそひしたゝす……九八  
 よもつしこめ……三四  
 よろしな……二九五

【れ】

六合……七  
 六師……五  
 黎元……四

【わ】

我物……四八  
 我が疊ゆめ……三五三  
 我がち……二九六  
 我が御世の事……三〇八  
 若くへに……三七一



若草を取る.....	二六
若帯日子天皇.....	二七
若倭根子日子大毘毘命.....	二四
和訶羅河.....	三七
和那美の水門.....	三九
和通吉師.....	二九
丸憑池.....	三四
丸憑坂.....	三七
傾れず.....	三七
藤が下の板にも.....	三八
別.....	三八
披上博多山の上.....	二七
伎をなして.....	二九
渡屯家.....	二八
わが前.....	二二
わがせの君.....	二七
わが見がほし.....	三四
わが國見れば.....	三〇
わかやる.....	一〇一

わがむれいなば.....	九八
わかやるむね.....	九三
わぎへ.....	三四
わぎも.....	三九
わななきて.....	二〇〇
わびて.....	九七

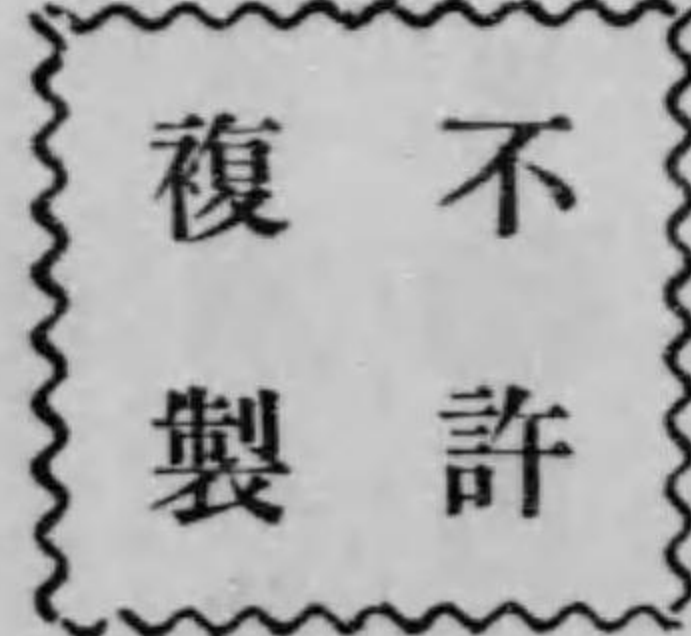
大正八年四月十五日印刷  
 大正八年四月十五日再版  
 大正九年四月廿三日四版  
 大正拾年四月廿三日四版  
 大正拾五年四月廿八日改訂十三版

著作者 植松安

發行者 阪本眞三

印刷者 寺井藤左工門

印刷所 株式會社 英舍



古事記新釋 正價金貳圓五拾錢

發行所

東京市神田區表神保町七番地  
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

小林榮子著 ●	源氏物語活釋 前篇	四六判 最上製	金四圓八拾錢	送料十八錢
小林榮子著 ●	源氏物語活釋 後篇	四六判 最上製	金四圓八拾錢	送料十八錢
小林榮子著 ●	大鏡活釋	四六判 最上製	金貳圓五拾錢	送料十二錢
石川 誠著 ●	新撰徒然草講義	四六判 最上製	金貳圓五拾錢	送料十八錢
尾上登美子 ●	頭註源氏物語大意	四六判 最上製	正價金參圓	送料十八錢
植村 安著 ●	古事記新釋	四六判 最上製	金貳圓五拾錢	送料十二錢
小林好日著 ●	新體國語法精說	菊上判 最上製	金貳圓八拾錢	送料十八錢
龍澤良芳著 ●	文檢國語漢文科題詳解	四六判 最上製	金貳圓五拾錢	送料十二錢
石川 誠著 ●	現代文學新選	四六判 最上製	金四圓八拾錢	送料十八錢
石川 誠著 ●	現代詩歌新選	四六判 最上製	金貳圓八拾錢	送料十八錢

東京市神田 大同館發行 表神保町七

〔大同館發行圖書目錄〕

宇野 哲人著 ● 支那哲學史講話 菊上判 (參拾版) 金貳圓八拾錢 送料拾八錢

本書は上古より清末に至るまでの支那思想の概要を極めて平易に簡明に叙述して最もよく要説を盡くせるものなり從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補促せられて亦遺憾なし初學者にも専門家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

宇野 哲人著 ● 支那哲學の研究 四六判 (九版) 金貳圓八拾錢 送料拾八錢

本書は上は三代より下は近世に至り或は一代の思想を概論し或は特殊の問題を細叙し支那哲學に關する博士獨特の研究は殆んど此書に網羅せらるる支那哲學史講話を讀んで略々大意に通ずるものは更に此書に就て斯學の堂奥に參せん。

紀平 正美著 ● 自我論 四六判 (貳拾版) 金貳圓參拾錢 送料十八錢

本書自我論一編は全く自分の觀念論の上に立脚して組織したるものである從て缺點も多からうと思ふが同時に又自分のものであるとの自信をも有つて居るのである前編「自我の分析」に於ては出來得る限りの分析を試みた後編人格の價値に於ては人格の意義と價値とを論理的に定めんと企てた。

紀平 正美著 ● 改訂人格の力 四六判 (八版) 金壹圓八拾錢 送料十八錢

本書は先に一度出版せられしものを「自我論」の出來たと同時に讀者の要求により著者が全部新しく改訂して發表せられしものである「自我論」を讀まれし人も又これから入つて「自我論」を讀まれる人も必ず併讀せねばならぬ重要な姉妹篇である。

大關増次郎著 **カント哲學批判**

四六判 (五版) 最上製

正價金貳圓 送料十二錢

カントより新理想主義へ新理想主義からヘーゲルへの道を辿らうとする者は先づ近世哲學の權威フイッシャーのカント哲學批評を傾聴するの有意義たるは敢て賢言を要しないこれ眞摯なる士にすゝむる所以なり。

大關増次郎著 **カント研究**

最上製 (三版)

金七圓八拾錢 送料卅六錢

哲學研究者がカントへの隨一の手引書。近代思想のことくくが或はカントを批判し或はカントを祖述しないものは無いのであるから近代思想を極めるものは必ずカントまでさかのぼらなければならぬ本書はその手引書である。

稻毛 詛風著 **オイケンの哲學**

四六判 (十三版) 最上製

金壹圓六拾錢 送料十二錢

オイケンは現代思想界の明星也從つて苟くも思想界に關し精神事業に従事する者にして彼を知らぬ人は未だ到底哲學宗教道德教育文明歴史乃至生活を論ずる資格なし。現代生命に觸れ生き甲斐ある生活を生きんとする者は本書を讀め。

野村 隈畔著 **ベルクソンと現代思潮**

四六判 (九版) 最上製

金貳圓五拾錢 送料十二錢

本書はベルクソンの思想を中心として現代の哲學及生活の梗概を述べたものであるだけに獨りベルクソン哲學の特色と價値とを學び得るのみならず弘く哲學的思想を解する上に於ても亦尠なからざる價値がある。

吉田絃二郎著 **タゴールの哲學と文藝**

四六判 (十六版) 最上製

金貳圓五拾錢 送料十八錢

タゴールは所謂近代文明に中毒した歐洲人から清涼劑緩和劑として歡迎せられた。漸く物質文明の弊に苦しみ且つ自我の目覺めに惱みを懷いて來かゝつた吾々青年にはたしかに伸びくした心地よい感じを與へて呉れる。

高橋 敬視著 **西洋哲學史講義**

最上製 (新刊)

金參圓八拾錢 送料十八錢

哲學を知るにはどうしても哲學史を讀まなければならぬ。本書は古代哲學から最近のプラグマチズム、新實在論に至る迄を組織的に簡潔平明に初學の人にも容易に了解が出来る様に叙述したるものである。

市川 一郎譯 **高尚なる理論を哲學概論**

最上製 (新刊)

金四圓八十錢 送料十八錢

本書はフレッツァ博士の原書を譯補せるもので内容は用語の簡潔にして平明なるは勿論吾々各自が日常屢々遭遇する所の經驗を例證として講述せる初學者には最もよい入門書である。

石川 誠編 **現代文學新選**

四六判 (三版) 上製

金四圓八拾錢 送料十八錢

本書は現文壇の中心作家菊地寛・芥川龍之助・島崎藤村・田山花袋・北原白秋・有馬武郎等十八氏の代表的作品長短編約七拾篇を收めそれに頭註を施し各編毎に鑑賞的著者獨特の批評を加へたるものである。

石川 誠編 **現代詩歌新選**

四六判 (新刊) 上製

金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書は現代詩歌を味はんとする者及一般文藝愛好者の爲めに趣味的に研究的にその鑑賞手引として出來たもの代表的詞人七拾餘名の歌詞句から精選し脚註を加へし現代詩歌壇の金字塔である。

古屋 利之編 **現代田園文學新選**

四六判 (新刊) 上製

金貳圓五十錢 送料十八錢

田園は人類の心臓であり太陽である。靡爛しきつた現代人の思想と生活に新しい血をそそぎ温い光を與るものは其處に育まれた田園文學を措いて他にないと信ずる本書はこの意味に於て現代人の渴望を癒すに足る絶好の讀物であらう。

小林 好日著 **新體國語法精説** 菊上製 (三版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書は一名標準語法精説と云ふ文檢受驗者が日本文法研究上必要欠くべからざる参考書である内容は最も進歩したる科學的方法の下に試みられた我現代語の研究書であり文法から口語に至る歴史的變遷を顧みられた比較對照語法である。天下の標準語問題を取扱つたもの、少い今日に於て國語問題に思を潜める者は必ず一通讀しなればならぬ。

吉波 彦作著 **漢文** (復文訓讀) **研究要訣** 四六判 (三版) 正價金參圓 送料十八錢

文檢國語漢文科受驗の秘鍵を握つて一躍難關通過の榮冠を獲んとするの諸彦は先づ本書を看よ。本書は著者が多年の經驗と豊富な材料とを以て新に受驗者に提供せる他に絶對に類書のない要訣である。第一篇は白文訓讀を第二篇には復文作文を第三篇は支那時文を解釋したる國漢文受驗者には最新の捷徑である。

植松 安著 **改訂古事記新釋** 四六判 (拾參版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書き下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者か國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に懸けられ大和民族發展の由來を明にし國民歸嚮の中心を開く是れ本書の特長なり世界の日本東洋の日本我等の日本これをこの書に得よ。

植松 安著 **紀記の歌の新釋** 四六判 (三版) 正價金貳圓 送料十八錢

古典の國民化これは私の大に望む所であつて先に「古事記新釋」を著けしはか今又こゝに紀の歌のみに就いて書いて見た。古事記は文學日本書紀は歴史といふ著者の見方である本書にはもとより新論とては無いが只現代の一般人士が讀むには便宜であると思ふ。

小林 榮子著 **源氏物語活釋** 編前 四六判 (三版) 金四圓八十錢 送料十八錢

小林 榮子著 **源氏物語活釋** 編後 四六判 (三版) 金四圓八拾錢 送料十八錢

全編漢字をあて、講義に代へ頭註精を極め粹を華む。この書を讀む人は到底行はれざる源氏物語の全講を居ながら聴くと共に又中古國語辭典を座右に備ふるの効果を收め得べし加之本書の一大異彩として著者研鑽の餘一紫式部の源氏物語は雲隠までなりとの斷案を下したる事と紫式部日記秒錄講義によりて式部が擾々たる公子貴女を靜觀せるさまの躍如たるを見るべし本書は初めて古文に志す人にも直ちに堂奥の源氏物語を玩味する事を得べき國民必讀の良書也。

小林 榮子著 **頭註大鏡活釋** 四六判 (三版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

四鏡中も最も重要な大鏡は藤原氏の榮華と時代相を描いた史的にも文學的にも貴重なる書である本書は著者が難解な文章を流通無礙の筆を以て何人にも了得し得る様活釋した所現代女流國語學者中の才人であると云はねはならぬ。

石川 誠著 **新撰徒然草講義** 四六判 (新刊) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は徒然草を三部に分ち前編には受驗に尤も必要な又徒然草の本質を直ちに了解し得る段を收めて詳解したこれは受驗必讀の篇であり本書の眼目である中篇後篇には受本位として繁簡中庸殘りの全部を收めて詳解したものである。類書中の白眉の書としてすゝむ殊に文檢と高等學校入學準備としては最適の書である。

尾上登良子著 **源氏物語大意** 四六判 (八版) 正價金參圓 送料十八錢

本書は大意とは云へ文情詞勢語氣なども原本の體を傳へんと苦心したるものなりされば本書一巻の通讀は原本を讀むに異らざる効果あり巻頭に挿入したる系圖並に年表は本書の参考としては勿論其他一般の源氏物語を研究する人にも唯一の極めて有益のものである。文檢受驗者國文研究者必讀の良書也。

宇野 哲人著 **四書講義 大學** 最上製 (拾參版) 金貳圓參拾錢 送料十八錢

宇野 哲人著 **四書講義 中庸** 最上製 (拾四版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

儒教の目的は大學に備はり、儒教の根本義は中庸に明かである。かくて中庸の二書は經となり緯となり。互に相待つて儒教の真相を傳ふ。著者は如上の理解を以て先に大學講義を著し、今亦中庸講義を著す。大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は請ふ更に中庸に就いて儒教哲理の眞面目を了せよ。尙附録數篇は皆直接間接に大學中庸の意義を明かにするものである。

龍澤 良芳著 **左傳選釋** 最上製 (新刊) 金參圓八拾錢 送料十八錢

支那古典中最も難解を以て目せられる左傳は文檢受檢の際の必讀書である本書内容は讀方講義解釋參考の四冊に分ちて丁寧親切に叙述せる文檢受檢には本書一冊で他に必要なしと言ふまでにした他に絶対に類書の無い好參考書也。

教育學術會 **論語解義** 最上製 (四版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書内容は(一)解説(二)字句講義(三)思想研究の三篇に分ちて叙述し最後に論語思想を現代の思想の上から縦横に批評を試みた文檢修身・漢文教科受檢者の是非熟讀すべき良書也。本書は實經驗に鑑み本文を特に白文とせり。

教育學術會 **四書研究** 最上製 (五版) 正價金貳圓 送料十二錢

本書は文檢受檢者の爲めに從來の四書研究難を救はんとして著はされしものである四書の思想的研究は我國に於ても支那に於ても本書がその最初のものであれば從來の文學の上の研究に飽きて居る一般の人は本書に依て味方がよい。

栗原寅次郎著 **大日本地理精説 上卷** 最上製 (八版) 金五圓八拾錢 送料廿七錢

栗原寅次郎著 **大日本地理精説 下卷** 最上製 (七版) 金五圓八拾錢 送料廿七錢

日本地理教授の目的は専ら本邦國勢の現状を詳かにして愛國心に基づく有爲の國民的活動に導く事にある。本書は著者年來の經驗に則つて特に最新材料を蒐集選擇し帝國の國勢を形成せる自然並びに人文の兩方面に亘る各般の事情に就て懇切丁寧な叙述を加へられたる、眞に是れ斯界の權威たるべき良書である。本書の特色は材料の厳選と其の具體化・學習的興味の喚起・統計の正鴻と記述の懇切等である。

三村 信男著 **地理學習便覽** 最上製 (三版) 金壹圓貳拾錢 送料十二錢

世界的知識を得るには地理を修める必要があり世界的日本を知る爲には地理科は最も適せる教科である本書は此の意味に於て技業に亘るを避け稍學術的に一般地理學的現象を解説せるもので深き理法を解し研究の指針となる書也。

栗原寅次郎著 **大日本國勢地理** 最上製 (新刊) 金參圓八拾錢 送料十八錢

本書は我が國土の自然と人文に亘る各般の實情を精査探求し特に平易を旨として記述されたるものにして一般地理教授上の好參考書たるは勿論更に國民の必讀すべき近來の快著である敢て世の愛國の士に薦む。

栗原寅次郎著 **郷土地理の研究** 最上製 (五版) 正價金貳圓 送料十八錢

郷土は世界の縮圖なりで窓外に一步を出ずれば四近の山嶽河川原野等探つて以て本科學習の基礎をなすべき好教材を網羅せるに於てを本書は特に之が教授の方法を説示する等懇切丁寧を極む眞摯なる研究家必讀の書也。

●新定國史教授用參考書として最も完備せる書●

京都府女子師範學校教諭 德重淺吉 同訓導 吉良佐太郎  
京都府女子師範學校訓導 松本正男 同訓導 内藤孫一 共著

東京神田  
大同館  
行發

# 史眼 國史教授の原理及實際

## 拾 版

(菊判最上製美本五學年用(上卷)正價金參圓五拾錢送料十二錢)  
(全貳册千二百頁六學年用(下卷)正價金四圓五拾錢送料十八錢)  
世に本書上巻を出して世に問ふや教授參考書中の白眉として多大の推賞を蒙りしが爾來著者思を潜むるに正に一年憊瘁の苦心を嘗めてこゝに年來の遺著を傾盡せるもの即ち本書下巻なり。而して今回は特別適確なる解説に加ふるに卓拔清澗なる批判を各項に設けて教授の徹底を計り教材も教科書以外に皇太子殿下の攝政なる一章を加へて英皇儲御來朝迄の最近の事歴を述へ終りに國史教授の基本問題史眼養成の方策等苟も現代國史教授界に於ける重要な諸問題には觸れざるなく上巻と相俟つて其の完璧を期せり。敢へて世の眞理を熱愛する教育家に一本を勸む。

近世日本の教科的新解釋  
國民思想養成の鐵案  
世の移り行く道理の究明  
史眼養成の眞教授法

石田 吉貞著 **太平記新釋** 最上製 (三版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は太平記の重要箇所すべてをぬきこれに詳解を試みたものである一般の讀物としてもよく殊に受験者にとつては最も必要にして且つ充分なる書として敢て推薦する。

福永 弘志著 **竹取物語新釋** 最上製 (新刊) 金壹圓參拾錢 送料十二錢

本書は「かくや姫」の戀物語を書いたものであるが我邦の小説童話の源泉とも云ふべきもの文學に志す人國文研究者の一度は味はねばならぬ書である本書には註解の外口語譯も添へたり。

石田 吉貞著 **國文法の解義と練習** 最上製 (三版) 正價金貳圓 送料十二錢

應用問題のみ出る文法に練習題を多くした參考書は出なかつたのは確に一大缺陷であつた本書は此見地から解義は穩健と簡潔と獨習者に對する親切とを主とし練習題は出来るだけ多くして一々解答をつけたるもの實力を養はうとする人の必讀書である。

龍澤 良芳著 **源氏物語新釋** 最上製 (新刊) 金六圓八拾錢 送料廿七錢

本書は文檢研究者の爲めに出來たもので、内容は桐壺から明石までを親切丁寧に詳解しそれ以下の梗概を書きしものである之れを精讀せば詳細に源氏を理解し得、研究者の見のがせぬ必讀書である。

奈良島知堂著 **少年忠臣藏** 四六判 (新刊) 正價金貳圓 送料十二錢

四十七士の義舉は物慾と享樂に酔つてゐた元祿時代の生んだ一の驚異である本書は之れが事實に即し然も津々たる面白味も加へて一擧の顛末義士の心事を平易に叙述したものである。

甲斐 一二著

文檢 新教育說撮要

四六判 (新刊)

正價金貳圓  
送料十二錢

本書は最近東西洋新教育說の要點を簡明に叙述し説明し批判せるものである。實に文檢受験者のみならず教育上の新學說の研究に志ある人に取りては實に唯一無二の好資料たる良書である。

渡部政盛監修 文檢 教授學習法講義

菊上判 (再版)

正價金五圓  
送料廿八錢

文檢に於ては近頃學習に關する問題や學習本位の教授法の問題が頻りに出る而もこれに十分應答し得るものはない。本書は之等教授法研究者の爲めに叙述せるものであつて内容は平易明快要領よく而も受験の立場から見ても忽せにする所のない完備せる書である。

三浦 藤作著 國民道德要領講義

菊上判 (新刊)

金貳圓八拾錢  
送料十八錢

三浦 藤作著 教育大意講義 附 教育史大意

菊上判 (新刊)

正價金參圓  
送料十八錢

本書は文檢受験者又は教育學倫理學研究者のために執筆せるものである特色とする所は(一)最新の思潮と研究の結果とを汲みたる事(二)最も組織的系統的に叙述したる事(三)文章が極めて平易流暢たる事等である國民道德・教育大意の教科書としても参考書としても絶好の良書なることを斷言す。

渡部 政盛著 文檢 教育史

日本 東洋 西洋

菊上判 (六版)

金六圓八拾錢  
送料廿七錢

本書は日本東洋西洋とも古代より現今に至るまでの史實を全部網羅したるもので内容は系統的にして簡單明瞭ならん事に努めたる外文檢受験者に取りて隨一の教育史研究用書である本書一冊で十分合格し得る事云ふまでもなし。

一條 忠衛著 社會道德論

四六判 (再版)

金參圓五拾錢  
送料十八錢

社會道德なる語は誰でも知つて居るが之を組織的に説明した本は未だ嘗て世界に一冊も無かつた現代社會の暗黒面は全く社會道德の頹廢した結果である之を挽回して向上發達させる事は社會改造の最大なる問題であり世界人類の究極目的である。本書は之を警告した學者の先見であり豫言者の聲である近世稀なる名著であり萬人必讀の世界的經典である。

大久保 龍著 戲人としてのペスタロッチ

四六判 (新刊)

金貳圓八拾錢  
送料十八錢

ペスタロッチは世の人々が皆水平線上の歡樂を追ふて疲れてゐる時靜に水平線下に無限の靈池をみつめて安じきつて汲んでゐた。彼の八十二年の生涯はかく世の下層不遇の境地に泣く人々の救ひの友として捧げつくして毛筋ほども自己中心のところがないのである百年後の今日なは彼を禮讃渴仰措くところなきは誠にうべである。本書は彼の全生涯を五篇に脚色せるもの涙なくしてはゐられぬ近來の好著である。

市川 一郎著 小關 愛村著 ペスタロッチ全集

四六判 (四版)

金貳圓五拾錢  
送料十八錢

深遠なる創造的思想と博大なる殉教的活動とは現今愈々其價値を發揮し來り新カント派教育學者の眞劍なるペスタロッチ研究さへ起るに至つた。卑くも教育に従事する者にして彼を知らざれば共に談ずるに足らない。本書は雅馴平明の文で懇切にペスタロッチの全生涯を陳へ且著名なる彼の著述全部を譯述して居る蓋し彼の全部を知るには最も切切の良書である時恰も彼の百年祭に當る今日熱烈至誠なる教育者の清覽を望むものである。

志垣寛著 現代を基調とせる 高一の國史教授 最上製(新) 金四圓五拾錢 送料廿七錢

濱田壽郎著 尋常小學 國史學習問題と解答 最上製(新) 金壹圓貳拾錢 送料十二錢

伊藤勇太郎著 最新英語獨習講義 最上製(三) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

甲斐一二著 修身主要學說辭典 最上製(新) 金參圓六拾錢 送料十八錢

小堺宇市著 文檢圖畫科研究者の爲に 上製(新) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

笠井義夫著 文檢用習字科研究者の爲に 上製(三) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

吉本俊二著 文檢法制經濟研究者の爲に 上製(新) 正價金貳圓 送料十二錢

吉本俊二著 文檢法制經濟問題詳解 上製(三) 正價金貳圓 送料十二錢

伊藤勇太郎著 文檢英語科研究者の爲に 上製(七) 正價金貳圓 送料十二錢

本書は文檢の勉強方針を一新する所説を以て平易に溢るるが如き熱誠を以て叙述せるものである一般英文學研究者高等學校學生の讀物として無限の興趣を措く能はざらむ。

歴史は現代の「我」を學ぶための教科である。歴史研究の對象は單なる表面的史實ではなくて史實の底を流る國民精神そのものであるからした見解が高一の國史に試みられた物即ち本書である内容は各所に新機軸を出したる眞に國史教授界の先驅を成すものである。

本書は著者が兒童愛の精神から國史をよりよく學習せしめんがために國史教科書の各種にわたり重要事項を選びて作りたる問題である教師が之を扱へば注入主義の教授に陥らず眞に國史の本質より導かるる學習を指導し得らるる事と信ずる。

本書は英語を毫しも知らない人の爲に初學者の希望と心理とを知り抜いた著者が最も解り易く覚え易い方法と痒い所に手の達く懇切と一度讀出したり已められぬ面白味とを以て書かれたものである。必ずや天下幾萬の獨學者と中學生諸君との渴仰の的となるに相違ありません。

本書は修身・教育兩科の研究に志す人が研鑽の傍所要題目の要點を敏速に把握せらるるの便に供せんが爲めに編纂したるものであるその記載の題目は修身・教育の各分科・教育史・心理學・論理學・教授法・管理法・哲學・社會學・文藝の各方面にも及び特に最近の思潮に鑑み努めて新題目を逸せざらんことに努力したりして索引は五十音順に排列し字音假名遣法を用ひたり。

文檢圖畫科研究者の爲めの著書極めて少し之あるとすると全的に系統立てたる書籍は未だ見ぬ所である著者特に此の點を考慮して他に類を見ざる親切を盡くす。受験者は本書によつて合格を期せられよ受験せる人も教授參考に必讀あらん事をすむ。

文檢の他學科にあつては參考書を多く目にするが習字科は不幸にして水先案内となるべき有力なものあるを聞かない本書は之れら受験者の爲めに研究の方法古法帖の學ぶべき程度設問の解答等の諸問題につき明快に要決をしめせるものである。

本書は専ら文檢法制經濟科受験者の爲めに編述せるものである内容は委員や學者の穩健中心なる學説を縱とし最近十數年間の豫備本試験問題全部に涉り詳解し受験者の爲めに唯一の指針たる事を期したるものである。



鈴木忠康著 **博物通論** 想問題と其答解 四六判(九) 正價參拾五錢 送料四錢

最近入學試験に博物通論を課せらるるがこの方面の参考書が絶無で學生の困つて居る状態に同情し著者が多年の経験によつて重要問題五拾題を選びそれに簡明適確なる解答を附したるものである受験者は即刻一讀せよ文檢受験者も研究上必讀のものである。本書中より十五年度の問題は全部合格してゐる。

平松菊郎著 **模範動物學詳解** 四六判(新) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書内容は中等諸學校用動物學教科書を基本として複雑なる事項をよく整理し極めて記憶し易き様に作られたり而して記述の順序は高等動物より下等動物に至り最後に動物學通論に及ぼしたるもの類書中他に比類なき眞に「模範」たる参考書である。内容充實せる眞に有益の良書である。

宗敬著 **分類的算術解法の研究** 四六判(三) 金壹圓六拾錢 送料十八錢

本書の特色は標準となるべき目抜の問題を精選して問題の考へ方解き方を分類的に一々例解し特に圖解の仕方主力を注ぎたる點と如何なる試験問題でも面白くすらく解ける様な自發的學び方の結晶が各頁に躍如として現はれて居る點等である。受験者必讀の指憲書定評ある名著である。

宗敬著 **幾何學自發的學び方** 四六判(新) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は幾何學の如何なる試験問題が出て面白くすらく解ける様な自發的學び方想像力工夫力創作能力養成に努力したる點とそれらの結晶が各頁に躍如として織込まれたる點等である。

仲原善忠著 **理法日本地理原論及細説** 菊判(三) 金五圓八拾錢 送料廿七錢

今までの地理學教授は可成無味乾燥なもので地理學それ自身のもつ興味は大なるにもかゝらず學生の心は餘りそれに向けられてゐなかつた本書は全然新しい試みをなしたもので我國を一の單位として地形氣候産業都市等の各項を特色づけて叙述してゐる人と地に關する因果關係等を明かにし學生の自發的研究心と興味とを刺戟する事にとめてゐる誠に農業の部を編いてみるとわれわれは我國の農業の概略農村疲弊の因農村問題の起因等まで知ることが出来る新方面を開かうとする著者の努力は尊い。——(東京日日新聞批評)——

三村信男著 **地理學通論** 地文學の部 菊判(三) 金六圓八拾錢 送料廿七錢

三村信男著 **地理學通論** 人文學の部 菊判(三) 金六圓八拾錢 送料廿七錢

地理學は其の範圍頗る廣く之が研究に多大の不便と苦痛を感ずるものであるしかして其の理由の一として綜合されたる地理學の良書のない事であるが著者はこゝに思ふ所ありて各種學校の地理教授者には勿論文檢受験者の爲に僅の努力にて多大の習得を目的として最新の學說に基述べられたのが即ち本書である本書は地文及人文地理事項を細大漏さず之を詳細し百數十個の挿畫によりて内容を明かにし且つ終りには詳細なる索引を附し之を利用する時は本書は實に地理學の寶典となるものである。

栗原寅治郎著 **日本産業地理精説** 菊判(五) 正價金四圓 送料十八錢

本書は我國の重要産業に就て古來發達の過程を明かにし内地及新領土に於ける斯業伸展の現勢を詳述し最新の材料に基きて記述平易懇切を極め誠に時局に適する良書たるを確信す

稻毛 詛風 著 **哲學入門** 四六判 (六) 金壹圓六拾錢 最上製 送料十二錢

深遠複雑な哲學を極めて簡明に叙述し何人にも一讀直ちに哲學の一斑を理解し得るやうに叙述せる絶好の哲學入門書である哲學を研究せんとするものは最初に本書に就け。

市川 一郎 譯著 **中等學校 上級用 哲學の一斑 基礎概念講義** 菊判(新) 金五圓八拾錢 最上製(刊) 送料廿七錢

本書内容は第一篇に於ては哲學の本質を概説して讀者既習の科學的知識は哲學を學んで始めて完了せらるゝ所以を教へ以下篇を分つこと九篇廿八章 心理学・論理学・美学・倫理学・認識論・宇宙論・哲學的心理學・宗教哲學・本體論等所謂廣狹兩義の哲學の諸分科を一も漏すこと無く講述す實に是れ内容形式共に完備せる知的中等國民必讀の書として江湖にすゝむ。東京日々曰く一冊で哲學の綜合講座をなしたものであると。

市川 一郎 譯著 **教育の基礎たる哲學** 四六判 (拾九) 金貳圓五拾錢 最上製 送料十八錢

哲學は難くして常人不可解のものなりと思ふ人多きは從來公にせられたる哲學書の罪である本書は哲學の素養皆無なる人士と雖も易々として現代哲學の概觀を捕捉し得る書である。

市川 一郎 譯著 **教育の基礎たる社會學** 四六判 (三) 正價金貳圓 最上製 送料十二錢

過去の因襲教育が心理學に依て改造せられたるが如く行詰れる現代の教育は是非とも社會學に依て改造されなければならぬ實に本書の説く廣大にして根本的なる教育説は此の行詰れる今日の教育を廣潤清朗なる曠野に誘導する也。

◇明治教育社編纂◇ **發兌** 東京市神田區 表神保町七 **大同館書店**

文檢 **國民道德要領** (卅壹版) 四六判最上製美本 金貳圓五拾錢 送料十八錢

文檢 **教育大意** (拾七版) 四六判最上製美本 金貳圓五拾錢 送料十八錢

本國民道徳要領教育大意は姉妹篇で共に絶大の好評を博しつゝあり内容特色は合格者の經驗を基礎として編纂したる事、そして受験者に都合よき様に記述したる外試験委員の説を隨所に挙げたる事、問題解答を提げ類似問題を多く載せたる事、文章の平易なる事等にあり、されば文檢の受験者たるものは勿論各府縣の小學校教員檢定試験者にとりて無二の好参考書たる事は弊館の自信を以て推奨せる所以なり。

教育學術會著 **文檢 教育勅語詔書解義** (拾版) 正價金貳圓 送料十二錢

石川 誠著 **文檢 國語科研究者の爲に** (拾貳版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

石川 誠著 **文檢 漢文科研究者の爲に** (拾貳版) 正價金參圓 送料十八錢

伊東勇太郎著 **文檢 英語科研究者の爲に** (五版) 正價金貳圓 送料十八錢

教育學術會著 **文檢 國民道德問題解答** (五版) 金壹圓八拾錢 送料十二錢

中等學校教授用資料と檢定受験用とを兼備せる唯一の西洋史參考書

◇小林博氏新著 (多年苦心の大著、愈完成發賣)

# 文部省檢定 受験用西洋通史

東京大田  
神田同  
館發行

(菊判最上製美本 上卷) 正價金六圓八拾錢 送料廿七錢  
(全二冊箱入千五百頁 下卷) 正價金四圓八拾錢 送料十八錢

●●●(書讀必者驗受史洋西檢文)●●●

## 【本の特色】

(一) 教授用の便 文部省教授細目と著作・村川・瀨川・大類・磯田・齋藤・清・峰岸・齋藤一の各博士教授の著せる中等學校西洋史教科書を參照し其項目の敷衍につとめ且說話筆記等の取扱にも苦心した。  
(二) 受験の實經驗 文檢受験は著者の苦き實經驗に鑑み選擇配列に頗る苦心して表解圖點を施し極めて多き參考史話を載せ其の興味を以て讀者の倦怠を防ぎたり。故に本書は項目體にして見易く時間を省き腦裡に千萬の史實を牢記せしむるは信じて疑はず。  
(三) 記事の詳密 著者は多年の西洋史研究と共に翻譯の史實を本書に發表しツタンカーメン王の事蹟よりドリス案日露交渉の最近に及び繁簡の要を得たれども尙記事頗る詳密にして多大の頁を費し從來の文檢問題の如きは自ら悉く織込まれたり。  
(四) 文檢問題解答 本は卷末に索引を附して讀者研究の便を計り既往の文檢問題は四十一回迄列記し一々之に解答を附したり。

◇醫學士井上金輔・奥山壽太郎・木山淳一・額田勇共著◇

# 生理衛生教授の理論及實際

(好評五版) 新文化の建設に當り國民の體育を振起し、菊判最上製美本 正價金四圓 送料金十八錢  
して學校衛生學も近來勃興して改革の必要なるは示明の事なり、而して全壹册四百頁、  
生の教授正當を得ず從つて兒童生徒は自らの衛生に盲者の如し著者これを遺憾として本書を公にす、本書を用ひば兒童生徒は趣味津津の中に生理衛生の知識並に實行法を會得するは期して待つに似たり。今更躊躇するは愚、購ひて教授に試む者賢と示ふべし。

◇桐生高等工業學校教授島田慶一氏著 四六判最上製 正價金貳圓 送料金十二錢  
全壹册三百頁

# 家庭日常飲食物の知識

(好評五版) 本書は吾人が日常一日も缺くべからざる重要な食料品の全般に亘つて其由來・沿革・原料製造法・營養價值・貯藏法・鑑定までも平易に簡明に何人にも了解し得る様講話せるものにして發行以來絶大の好評を博し版を重ねる事數回發行益々増加す、一般家庭は勿論各學校の家事科理科の教育參考書としても好適のものなり。

發兌 東京市神田區 大田同館書店  
表神保町七

◇渡部政盛氏新著（隨一の民衆哲學辭書提供）

# 六版最新哲學辭典

菊判最上製美本  
全壹册背皮箱入  
金五圓八拾錢  
送料廿七錢

〔本書の特長〕（一）現代文化民衆の哲學慾を充すを目的として編纂したる事（二）文章平易記述簡宜しきを得て一讀直ちに其要點を捕捉し得る事（三）内容は哲學概論・東洋西洋哲學史・倫理學・東洋西洋倫理學史・論理學・美學・宗教・社會學・經濟哲學は勿論・生物學・心理學・哲學發達上の最近思潮特に現代哲學の記述に萬遺憾なからん事を期す（四）所謂廣義の哲學以外現代の文學藝術社會問題經濟問題政治問題婦人問題等にも亘りたる事（五）學生及文檢受験者の便を計り史上の問題を詳述したる事（六）文化生活への奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事等である要するに本書は現代人に缺く可らざる哲學の鳥瞰圖ともいふべき書也

◇東京豊島師範學校教諭 栗原寅治郎著（好評激甚増版出來）

# 拾壹版改造世界地理精説

菊判最上製美本  
全壹册七百頁  
金五圓八拾錢  
送料廿七錢

本書内容は材料選擇に當りて特に我國との關係の方面を重視し世界の大勢に通ずると共に直ちに彼我刻下の形勢を理解をしめ今後の國民として國家的生活を營むに十分なる資料を自然人文の兩方面より精査して集むるに努めたり要するに世界地理參考書として現代では本書を以て第一なりと大なる自信を以て推奨する所以なり

發兌 東京市神田區 表神保町七番地 大同館書店

中澤美治著 活動寫眞と教育 最上製（新刊）正價金貳圓 送料十二錢

本書は活動寫眞と教育との關係について其相互の根本的價值應用から學校教育社會教育上の實際的方策等に亘り具體的に詳細に論述したるもので教育者及讀者必讀の良書なり

中村古峽著 變態心理の研究 最上製（九版）金貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は變態心理を飽くまで學術的に且つ通俗的に説明したる我學界唯一の新著にして特に世上の山師が心靈を名として諸種の瞞着手段を行へることを素破抜きたる一章は最も痛快を極む

羽太銳治著 性慾教育の研究 最上製（拾參版）正價金參圓 送料十八錢

本書の内容目次を掲げれば、少年に性的知識の開發を必要とする理由、性慾教育の當事者、性慾教育の範圍並に方法、兩性に分かる原因、性的機關と性慾、生殖器の構造及異常、男子生殖器、女子生殖器、兒童の性的特質、性的現象、病的性的現象、等細目を分ちて詳細に叙述せるものである

宮本幸惠著 行詰つた現代の圖畫教育 最上製（新刊）金貳圓參拾錢 送料十八錢

現代の圖畫教育の現實と理想とを詳細に考察し解決して兩者の折衷即ち現實的理想主義を提唱したものである。圖畫教育に従事する人の必讀書である。著者は美術學校出で實際教育に従事せる新進の學者である

宮本幸惠著 彩色の研究と其取扱法 最上製（三版）金參圓八拾錢 送料十八錢

美麗なる石版廿五度刷の色圖十六葉。調和表實驗圖解は如何なる素人と雖も一見して彩色のグラマンマーを會得し衣食住或は眞善美の各方面に容易く結著ける事が出来る。大好評を博して各方面に歡迎せるものである

◇小學校・中學校・女學校用趣味の課外讀本出來!!

◇森山右一氏新著 四六判 最上製 正價金貳圓 送料十八錢

# 最新刊 和歌俳句自習讀本

本書は「和歌が作つてみたい」「俳句はどうしたら作れるだらうか」といふ小學生の爲めと「和歌俳句を研究したい」と望む中學生女學生の親切な入門書として生れたものである。特色とする所は綴方の藝術化、和歌俳句の導入に資すべく圖れると「作り方」の篇に例歌例句を多く挿入せると「註釋」の篇に新しき歌句數百首を掲載せる事である。行文平淡にして水の如く歌句優雅にして花の如く讀去り讀來れば初歩者には無二の指導たるべくすでに入れる者には必ずや詩心のとみにゆたけく伸び行くを覺えるに至るであらう。敢て一本を大方の前にすすむ。

## 目次

〔上編和歌の部〕…子供の和歌…自分の實感…動の歌と靜の歌…景の歌と心の歌  
 プロットとローカルカラー…倒置法と反覆法…「なるほど」歌と「さうですか」歌…和歌の日記…和歌と旅行…和歌のうつりかわり…少年歌ことば…和歌評釋…古歌百首  
 〔下編俳句の部〕…子供の俳句…季節と切字…少年歳事記…客觀句と主觀句…ポイントと餘情…配合法と擬人法…「しまった」句と「ゆるんだ句」…日記と俳句…旅行と俳句…俳句うつりかはり…子供俳句かるた…俳句評解…古句百吟…

東京市神田區 表神保町七番 大 同 館 發 行 振替貯金口座 東京八七八番

守屋貫秀著 ●少年曾我物語 四六判 最上製 金壹圓八拾錢 送料十八錢

奈良島知堂著 ●少年忠臣藏 四六判 最上製 正價金貳圓 送料十八錢

山口友古著 ●少年國史辭典 四六判 最上製 正價金貳圓 送料十八錢

尾上登良子著 ●源氏物語大意 四六判 最上製 正價金參圓 送料十八錢

福永弘志著 ●竹取物語新釋 四六判 最上製 金壹圓參拾錢 送料十二錢

守屋貫秀著 ●少年九郎判官義經 卷上 四六判 最上製 金貳圓五拾錢 送料十八錢

新井庄太郎著 ●少年九郎判官義經 卷下 四六判 最上製 正價金貳圓 送料十八錢

守屋貫秀著 ●綴方學習の泉 四六判 最上製 正價金貳圓 送料十八錢

福田正文著 ●童謠・民謠・詩傑選集 袖珍 最上製 金壹圓八拾錢 送料十八錢

濱田壽郎著 ●尋常國史學習題と解答 四六判 最上製 金壹圓貳拾錢 送料十二錢

東京市神田區 表神保町七番 大 同 館 發 行 東京市神田區 表神保町七番

我が初等教育界への一大貢献!!

東京女子師範學校 附屬小學校訓導 守屋貫秀・山口友吉・久米慧典共著

東京神田 大同館 發行

新刊 發賣

# 少年國史辭典

四六判最上製美本 全壹冊四百餘頁 正價金貳圓 送料十二錢

少年少女のための國史辭典出來!! 自學自習隨一の指針

少年少女諸君が國史即ち祖國發展の事蹟を眞に自ら學ぼうとするにはどうしても完備せる兒童用國史辭典が必要である。本書内容は五十音別にして國史教科書中の事實を大小漏なく解説せる外各教科に於ける史實を解明し尙御歴代表系圖・年表を附せる等眞に至り盡せりの良書である。今や自學中心主義の教育は燎原の火の如く全國を風靡し給も教育者の之が参考書の不備を等しく遺憾とせらるゝ時に際し我か勉學に熱誠なる少年少女諸君を初め各學校及一般圖書館の必備品たる本書を提供し得るは大に弊館の誇とする所である。

福田正夫著 ●童謠・民謠・詩傑選集 (拾版) 袖珍刊 最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢

前田徳一著 ●少年の思想と生活 (新刊) 袖珍刊 最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢

大久保 龍著 ●白ばら公子 (小説) (新刊) 四六判 最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢

## 七版 古事記新釋

四六判最上製美本 全一冊五百餘頁 正價貳圓五拾錢 送料十八錢

東京帝國大學文學部助教授文學士 植松 安著 (類書中の白眉) 著者はこの古事記を説くに當つて神代の卷に最も力を注いだ事を一言して置く索引については單語の解説を見出し得るのみならず古事記本文の事項を探り得るから目錄の代用となる。●難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者が國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に顯はれて大和民族發展の由來を明にし國民歸嚮の中心を説く是れ本書の特長なり。今や大戦後世界思想の急激なる變動は將に我國民思想に及ばんとす世界の日本東洋の日本我等の日本これこれの事に得よ。

## 再版 假名の日本書紀

(上卷) 金參圓五拾錢 (下卷) 金參圓八拾錢 送料各廿四錢

日本書紀の一體に假名日本書紀といふものゝ存する事は從來一部の學者に知られて居たが未だ普く其存在を知る人が少い。本書は著者が出來るだけの手を盡して調べ得た廿餘種の異本を参照して著述したものである。内容は本文を漢字交りに書下し漢字に振假名を附し假名に漢字を當て一段毎に簡明なる註解を加へ索引として辨ずべき詳細なる目錄を添ふ。我國體の淵源を知るに國民性の本質を明かにせる正確なる國史を最も平易に讀み得る書である。 發兌 東京市神田區 大同館書店

書良き可ふ備を本一非是に校學小

小林 博著	●詳説東洋歴史 上巻 全	金四圓五拾錢	送料廿七錢
小林 博著	●詳説東洋歴史 下巻 全	金四圓五拾錢	送料廿七錢
佐藤種治著	●参考 日本歴史精説 全	金五圓八拾錢	送料廿七錢
吉村重徳著	●落窪物語新釋 全	金貳圓八拾錢	送料十八錢
森山右一著	●神皇正統記新釋 全	金貳圓五拾錢	送料十八錢
小林榮子著	●伊勢物語活釋 全	正價金貳圓	送料十二錢
松本愛三著	●勅題選歌集 並 詠進法 全	金壹圓六拾錢	送料十二錢
奈良島知堂著	●少年乃木大將 全	正價金貳圓	送料十八錢
宮崎久松著	●少年古事記物語 全	金壹圓八拾錢	送料十二錢
西臺來太郎著	●参考 中等東洋史詳解 全	正價金貳圓	送料十二錢

七町保神表 ■ 行發館同大 ■ 田神市京東

▲教授用と檢定受験用とを兼備せる隨一の國史參考書▼  
 國學院大學 講 師文學士 岡部精一氏 高橋與惣氏共著

拾貳版 文部省檢定 大日本歴史 試驗問題對照

●菊判シロース製最上美本 紙數九百五拾頁 全壹冊 金七圓五拾錢 郵稅十六錢

本書は各種學校の國史料教授の參考に供し兼て各種の受験準備に資せんが爲めに編纂せるものにして教授參考に供する方法としては現行文部省の中等學校及小學校の教授細目を基礎とし之れを適宜配合して編纂を分ち國史の本幹を形成せる事實を精細に通説し又古今史學家の發表せし新説の穩健なるものは努めて之れを採録せり。試験準備に資する方法としては第一回より第廿六回に至る交檢試験問題を發題者の要求を推究探尋して一々精密に解釋し盡く各章末に添附せり。加ふるに編者多年の經驗と研究とを以て些の遺漏なきを期したれば諸學校に取りては繁簡適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たるべく檢定受験者殊に小學校教員諸氏に取りては教授用と受験準備用とを兼備せる斯學隨一の羅針盤たるべし。

發行所 東京市神田區表神保町六番地 大同館書店  
 振替貯金口座東京八七貳番

栗原寅治郎著	●地理教材有機的統合	全	金四圓五拾錢
栗原寅治郎著	●大日本國勢地理	全	金參圓八拾錢
神田精輝著	●地圖及略圖略法	全	金五圓八拾錢
新井順一郎著	●現代高一の國史教授	全	金四圓五拾錢
新井順一郎著	●現代高二的國史教授	全	金四圓八拾錢
吉波彦作著	●精要韓非子詳解	全	金四圓八拾錢
森山右一著	●文檢受驗用史記選釋	全	金參圓五拾錢
田井嘉藤次著	●最近支那時文寶鑑	全	金貳圓五拾錢
霜島勇氣男著	●高等國文國語詳解	全	正價金參圓 送料十八錢
石田吉貞著	●國文法の解義と練習	全	正價金貳圓 送料十二錢

東京市神田 大同館發行 表神保町七

◇石川 誠氏新著◇

東京神田 大同館發行

五版 萬葉集古今集選釋

四六判最上製本  
全壹册五百餘頁  
正價金參圓  
送料十八錢

（和歌入門者の必讀書） 本書は古來歌人の金科玉條として吟式し來つた萬葉集・古今集・新古今集三部  
檢受驗者諸君・各種學校受驗者・學生諸君及び和歌初學者の便を計り懇切丁寧に註解を施したものである。猶三歌集の  
詳密なる解題和歌史概要及三歌集參考書の解説を添へたものである。されば本書一巻で和歌史中の太古から現代に至  
る各時代の作例數百首を通観しける正に歴代和歌集を兼ねたものと云ふべき書なり。

◇文學士 小林好日氏新著◇（文檢受驗者必讀の要書）

新刊 新體國語法精說

菊判最上製本  
全壹册四百頁  
貳圓八拾錢  
送料十八錢

本書は最も進歩したる科學的方法の下に試みられたわが現代語の研究書であり文語から口語に至る歴史的發展を顧み  
られた比較對照法である音韻論品詞論から文章法論に至るまで懇切周到なる説明を施したもので國語の記述的・心理  
的・理論的・文典である。本書は又半面から見れば標準語の研究書であり標準語問題の理論的研究とその撰を異にして  
る初等中等を問はず國語教授に携はるもの必ず座右に備ふべき參考書なり。



大關増次郎著 ●カ ン ト 研 究 全 金七圓八拾錢 送料三十一錢

野村 隈畔著 ●ベルクソンと現代思潮 全 金貳圓五拾錢 送料十二錢

稻毛 詛風著 ●改訂オイケンの哲學 全 金壹圓六拾錢 送料十二錢

稻毛 詛風著 ●哲 學 教 科 書 全 金參圓八拾錢 送料十八錢

市川 一郎著 ●中等學校哲學の一斑 全 金六圓八拾錢 送料二十七錢

市川 一郎著 ●高尚な理論を平易に講義せる 哲學概論 全 金四圓八拾錢 送料十八錢

永野 芳夫著 ●デューイ教育學の研究 全 正價金貳圓 送料十二錢

永野 芳夫著 ●デューイ論理學の研究 全 正價金貳圓 送料十二錢

市川 一郎著 ●教育の基礎たる哲學 全 金貳圓五拾錢 送料十二錢

市川 一郎著 ●教育の基礎たる社會學 全 正價金貳圓 送料十二錢

東京市神田 大 同 館 發 行 表 神保町七

◇佐賀高等學校教授 文學士 高木 武著◇ (好評激甚)

# 四 版 受 驗 參 考 新 選 漢 文 要 義

本書は各種高等學校入學志望者小學校教員諸氏及一般學生諸君が自習の參考用書として漢文の眞髓を成可く迅速正確に會得せしむ可第一編文法要義には名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞、訓點の附け方等を解き第二編には誤り易き似字を第三編には誤り易き同訓異字の辨第四編には誤り易き字音假名遣の辨第五編には誤り易き熟語を解き尙故專成語要義を添へ一々比較對照し記憶判別に便利なる様特に意を注ぎて記述したり『萬朝報』本書を評して曰く親切に解きあれば學徒の利便尠からざる可しと必ずや各位が机上の便覽たるべし。

◇文檢研究會編纂◇ (類書中の白眉)

## 文 部 省 檢 定 中 等 教 員 各 科 受 驗 者 の 手 引

本書の特色は 試験委員の從來發表されたる談話は盡く蒐集して受験者の注意しなければならぬ大綱を説いた。そして各科合格者の經驗談を多數集めて必讀參考書時間の利用法研究上受験上の諸注意等荷も受験者の心得なければならぬ事項を細大となく説示した等受験者は何事をも措いても先づ本書を熟讀玩味しなければならぬ。

受 驗 者 の 一 大 福 音

東京市神田 大 同 館 發 行 送 料 十 八 錢 壹 圓 八 拾 錢

◇小林一郎氏新著◇

(著者が敬仰の熱情遂に本書を成す)

四版

# 芭蕉翁の一生

四六判最上製美本  
全壹册約六百頁

貳圓八拾錢

送料十八錢

其の生前に於ても死後に於ても芭蕉翁の如くに多くの崇拜者をもつて居る人は今古の詩人文士中に曾て例の無いことである此の如き人の一生は何人も之を研究して見て大なる教訓を得べきである著者は俳諧の専門家では無いが翁の作を愛誦すること既に三十年翁を識る上に於ては一種の自信をもつて居る隨て著者は此書を現代の各階級の人に薦めて其の批判を得ることを熱望して居るのである

◇小林一郎氏新著◇

——(芭蕉愛好者必讀書)——

新刊

# 芭蕉句集評釋

四六判最上美本  
全壹册四百頁

貳圓八拾錢

送料十八錢

(趣味と修養)

古今の詩人文士の中で芭蕉翁ほど多くの崇拜者をもつて居る人はあるまい。翁は俳人として力を與へる。翁の句集は何人も共に讀むべきものである。著者は全く素人であるから此の評釋は其道の人から見ても其の文句もあらう併し素人にして初めて捉へ得る所も多くあらうと思ふ既に翁を知つた人にも未だ知らぬ人にも是非必讀を希望する。

發兌 東京市神田區保町七丁目 大同館書店

398  
516

終